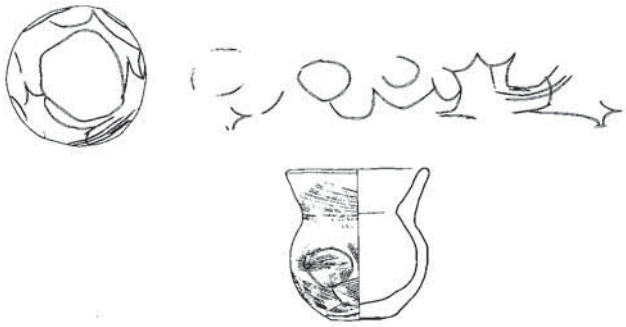
熊本県文化財調査報告　第１７７集

石の本遺跡群 Ⅰ

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



１９９９．３

熊 本 県 教 育 委 員 会

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

熊本県文化財調査報告　第１７７集

石の本遺跡群 Ⅰ

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９９．３

熊 本 県 教 育 委 員 会

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

序　文

熊本県教育委員会は、熊本県土木部の依頼により、平成６年度から平成９年度までの４年間を費やし、平成11年度開催予定の「くまもと未来国体」主会場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

小山山周辺には、石原亀甲遺跡を始め、白川対岸にある梅ノ木遺跡、六地蔵遺跡等の集落遺跡が点在しており、多くの文化財が確認されています。

今回報告する石の本遺跡群では、旧石器時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が発見されました。これまでに３万年以上前の地層から5000点余りの旧石器が出土したり、縄文時代晩期の集落跡が見つかっており、県内でも屈指の大遺跡であることが判りました。また小山山の山麓には古墳時代の集落跡も見つかっています。

遺構・遺物の量が多いため、それぞれの時代毎に報告書を刊行する運びとなり、本書は弥生・古墳時代の遺物・遺構についての報告となりました。今後他の時代の報告書も順次刊行の予定です。

これらが、県民の文化財に対する理解とさらなる文化財保護への一助となることを期待いたします。

最後に、本調査を実施するにあたり、県土木部都市計画課、熊本土木事務所、国体推進局、並びにその他の関係者の方々には、文化財保護に対して多大なる御配慮を賜りました。ここに深い感謝の意を表します。

平成11年３月31日

熊本県教育長　佐　々　木　正　典

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

例 言

1　本書は、熊本県熊本市平山町字石の本等に所在している石の本遺跡群の調査報告書である。

2　遺跡名については、熊本市及び県の遺跡地図では「平山石の本遺跡」となっているが、実際は幾つかの字にまたがっており、また調査面積が広く複数の文化層が分散して存在し、ひとつの遺跡として捉え難いこと、調査開始当時から一貫して「石の本遺跡」という名称を用いており、大幅な名称の変更は混乱を招きかねないことから、本書では敢えて「石の本遺跡群」という名称を用いている。

3　調査は、第54回国民体育大会秋季主会場整備事業（熊本県民総合運動公園拡張整備）に伴う事前調査として、熊本県土木部の依頼を受けて熊本県教育庁文化課が実施したもので、平成6年度から平成9年度までの4年間を費やした。

4　調査期間が複数年にわたっているため、石の本遺跡群の調査報告書は、時代や調査区毎に分冊して刊行するものとする。ちなみに本書は弥生・古墳時代について報告したものである。

5　本書の執筆は、第1章第1節を江本直が、それ以外を中村幸弘が行った。

6　測量図並びに遺構図の一部は、（有）埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。

7　本書で用いている調査区位置図は、熊本土木事務所から提供された平面図を加筆・転用した。

8　遺物の実測は、土器については中村の他に井上裕美、貞苅美津子、津留雅子、宮崎典子が行い、その他は中村が行った。また製図は河原京子、佐藤淳子、濱崎清子が行った。

9　遺構の写真撮影は中村の他に廣田静学、岩谷史記、田中智宏が行い、遺物の写真撮影は中村が行った。

10　本書に掲載した資料は、熊本県文化財収蔵庫で保管している。

11　本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、中村が担当した。

凡 例

1　調査区の割付けは、4級基準点を基に平面直角座標系の第2系における座標値（X，Y）＝（−18700，−19000）を起点とし、遺跡独自の座標値（石の本座標値）を設定して行っている。なお座標値（X，Y）と石の本座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

$x=X+18700$

$y=Y+19000$

2　本書で使用している方位は、調査区位置図や測量図においては座標軸を基準とした北を指しており、遺構図の方位も同様である。

3　現地での住居址の実測は、20分の1の縮尺で行った。また報告書に掲載した住居址の実測図は60分の1、炉跡は30分の1に統一した。 撹乱坑は1点鎖線で表現し、遺構ラインを撹乱坑やトレンチ坑が切っている場合は点線で表現した。また住居址内の焼土にはスクリーントーンを貼り、炭化物はそのまま図示した。

4　遺物の実測は原寸で行い、報告書に掲載した実測図の縮尺は土器を4分の1、その他を2分の1で統一した。

5　出土遺物については、基本的に各時代毎に番号をつけ、さらに遺物の種類毎でも番号を設定している。それらは巻末の出土遺物観察表の番号と一致している。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

本 文 目 次

序文
例言
凡例
第１章　調査の契機と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯・調査組織
　第２節　調査の経過

第２章　周辺の地理的・歴史的環境 …… 4

第３章　調査の成果 …… 9
　第１節　各時代の概要
　第２節　弥生時代
　　1　１号住居址
　　2　包含層遺物
　第３節　古墳時代
　　1　１号住居址
　　2　２号住居址
　　3　３号住居址
　　4　４号住居址
　　5　５号住居址
　　6　６号住居址
　　7　７号住居址
　　8　８号住居址
　　9　９号住居址
　　10　包含層遺物

第４章総括 …… 34
　第１節 弥生時代
　第２節 古墳時代

出土遺物観察表 …… 37
報告書抄録 …… 39
図版

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

挿 図 目 次

第１図　調査進行図（１区・52区・54区・55区）
第２図　石の本遺跡群周辺遺跡分布図
第３図　石の本遺跡群調査区位置図及び割付け図
第４図　石の本遺跡群基本層序図（概略）
第５図　弥生時代遺構配置図
第６図　古墳時代遺構配置図
第７図　弥生時代１号住居址実測図
第８図　弥生時代包含層遺物実測図（１）
第９図　弥生時代包含層遺物実測図（２）
第10図　古墳時代１号住居址実測図
第11図　古墳時代１号住居址出土遺物実測図
第12図　古墳時代２号住居址実測図
第13図　古墳時代２号住居址出土遺物実測図
第14図　古墳時代３号住居址実測図
第15図　古墳時代３号住居址出土遺物実測図
第16図　古墳時代４号住居址実測図
第17図　古墳時代４号住居址出土遺物実測図
第18図　古墳時代５号住居址実測図
第19図　古墳時代５号住居址出土遺物実測図
第20図　古墳時代６号住居址出土遺物実測図
第21図　古墳時代６号住居址実測図
第22図　古墳時代６号住居址周辺出土遺物実測図
第23図　古墳時代７号住居址出土遺物実測図（１）
第24図　古墳時代７号住居址実測図
第25図　古墳時代７号住居址出土遺物実測図（２）
第26図　古墳時代８号住居址実測図
第27図　古墳時代８号住居址出土遺物実測図
第28図　古墳時代９号住居址実測図
第29図　古墳時代９号住居址出土遺物実測図
第30図　古墳時代包含層遺物実測図（１）
第31図　古墳時代包含層遺物実測図（２）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図 版 目 次

図版 1　石の本遺跡群遠景
図版 2　石の本遺跡群近景（54・55区）
図版 3　弥生時代１号住居址　　１．完掘状況（西から）、２．完掘状況（北から）
図版 4　弥生時代包含層遺物
図版 5　古墳時代１号住居址　　１．遺物出土状況（西から）、２．完掘状況（西から）
図版 6　古墳時代２号住居址　　１．検出状況（西から）、２ 完掘状況（北から）
図版 7　古墳時代３号住居址　　１．遺物出土状況（北から）、２．完掘状況（北から）
図版 8　古墳時代４号住居址　　１．遺物出土状況（西から）、２．完掘状況（西から）
図版 9　古墳時代５号住居址　　１．遺物出土状況（北から）、２．完掘状況（西から）
図版 10　古墳時代６号住居址　　１．完掘状況（東から）、２．完掘状況（南から）
図版 11　古墳時代７号住居址　　１．炉跡（上から）、２．完掘状況（北から）
図版 12　古墳時代８号住居址　　１．焼土・炭化物検出状況（南から）、２．完掘状況（南から）
図版 13　古墳時代９号住居址　　１．遺物出土状況（西から）、２．完掘状況（北から）
図版 14　古墳時代１号住居址出土遺物
図版 15　古墳時代２号住居址出土遺物
図版 16　古墳時代３号住居址出土遺物
図版 17　古墳時代４号住居址出土遺物
図版 18　古墳時代５号住居址出土遺物
図版 19　古墳時代６号住居址及び住居址周辺出土遺物
図版 20　古墳時代７号住居址出土遺物
図版 21　古墳時代８号住居址出土遺物
図版 22　古墳時代９号住居址出土遺物
図版 23　古墳時代包含層遺物

表 目 次

第 1 表　石の本遺跡群周辺遺跡一覧
第 2 表　弥生時代出土遺物観察表（土器）
第 3 表　古墳時代出土遺物観察表（土器）
第 4 表　弥生・古墳時代出土遺物観察表（鉄器他）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第１章　調査の契機と経過

第１節　発掘に至る経緯・調査組織

平成11年10月に第54回国民体育大会秋季大会が熊本市を中心に実施されることになり、同４年３月その主会場は熊本県民総合運動公園を南側に拡張して整備を進めることが決定された。総面積は約34.8ｈａに及ぶ広大な場所であり、主会場となる陸上競技場や、全天候型ドーム競技場等の建設が計画され、事業名は熊本都市計画公園事業6.6.3号熊本県民総合運動公園拡張整備であった。事業主体は熊本県土木部都市計画課と熊本土木事務所工務課で、同９年５月には世界ハンドボール大会、同10年10月にプレ国体を行う予定であり、これらの大会の事前に完成する工程が作成された。

予定地内の埋蔵文化財に対する協議は同年度から始められた。一帯の行政区は熊本市平山町であり、農地がほとんどで、一部に宅地や、山林がみられる状況であった。昭和40年代に、熊本県民総合運動公園建設に伴う石原亀甲、山尻遺跡の大規模な発掘調査が実施されたように、神園山、小山山の山麓にあたり、そして白川中流域左岸の絶好の丘陵地に位置しており、大規模な遺跡が存在する可能性が非常に強いものと予想された。

都市計画課との協議及び依頼を受けて、平成４年度より現地への立ち入りが可能となったところから順次試掘調査を行うこととなった。県文化課松本健郎文化財調査係長を中心に西住欣一郎文化財保護主事や木村元浩学芸員らが第１次から４次の試掘調査を行った。その結果、国体関係南北線（通称）から西側には縄文時代の遺構や遺物が検出されはじめ、発掘調査を必要とする箇所が次第に拡がっていく状況であった。一方、道路から東側の屋内運動広場（パークドーム）建設予定地は遺構や遺物が検出されず、埋蔵文化財は存在しないことが判明したため、調査の対象から除外された。ちなみに、発掘調査の対象となる南北線道路から西側一帯の総面積は約212,000㎡で、発掘調査を必要とする面積は約101,000㎡と判断された。

協議が重ねられたが工事工程の都合で発掘調査は平成６・７年の２ヵ年で終了することが必須であった。したがって、調査員の増員を計る必要があり、各関係機関との協議が続けられた。また、都市計画課では平成６年度から調査費の費用が予算化され、文化課が調査を実施することとなった。県文化課の調査員７名が担当することになり、発掘調査の歴史の中でも最も大規模な発掘調査がスタートしたのである。

当初、２ヵ年で行う予定であったが、７年度までに用地買収が完了しなかった所があったり、小山山東麓を中心に旧石器時代や古墳時代の遺構・遺物が非常に多く出土したため、調査が続けられた。最終的には、平成９年度で調査が終了した。平成８年度からは、報告書作成のための整理作業も進めており、平成10年度から報告書を分割して刊行していくことになった。

なお、調査組織は以下のとおりである。（敬称略、順不同）

調査組織

調査主体	熊本県教育委員会		
調査責任者	桑山裕好	（文化課長）	平成６～８年
	豊田貞二	（文化課長）	平成９年

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

調査総括	丸山秀人	（教育審議員・課長補佐）	平成６～９年
	松本健郎	（主幹・文化財調査第１係長）	平成６・７・９年
	島津義昭	（主幹・文化財調査第２係長）	平成８年
調査担当	江本　直	（参事）	平成６・７年
	坂田和弘	（文化財保護主事）	平成７・８年
	廣田静学	（文化財保護主事）	平成６～９年
	池本利直	（文化財保護主事）	平成７年
	亀田　学	（学芸員）	平成６・７年
	宮崎敬士	（学芸員）	平成６・７年
	池田朋生	（学芸員）	平成６～８年
	矢野裕介	（学芸員）	平成６・７年
	青木勝士	（主　事）	平成６・７年
	三木ますみ	（学芸員）	平成７年
	帆足俊文	（学芸員）	平成７年
	中村幸弘	（学芸員）	平成７～９年
	北原美和子	（嘱託）	平成７年
	阿南　亨	（嘱託）	平成７年
	山田大輔	（嘱託）	平成７年
	荒木聖子	（嘱託）	平成７年
	岩谷史記	（嘱託）	平成９年
	小谷桂太郎	（嘱託）	平成８年
	田中智宏	（嘱託）	平成９年
	三好伴典	（嘱託）	平成７年
整理担当	中村幸弘	（学芸員）	平成10年

専門調査員（敬称略、順不同）

賀川光夫（大分県考古学会会長）　三島　格（肥後考古学会長）　橘　昌信（別府大学文学部教授）　戸沢充則（明治大学文学部教授）　甲元眞之（熊本大学文学部教授）　松藤和人（同志社大学文学部助教授）佐藤宏之（東京都埋蔵文化財センター主任研究員）　長谷義隆（熊本大学理学部教授）

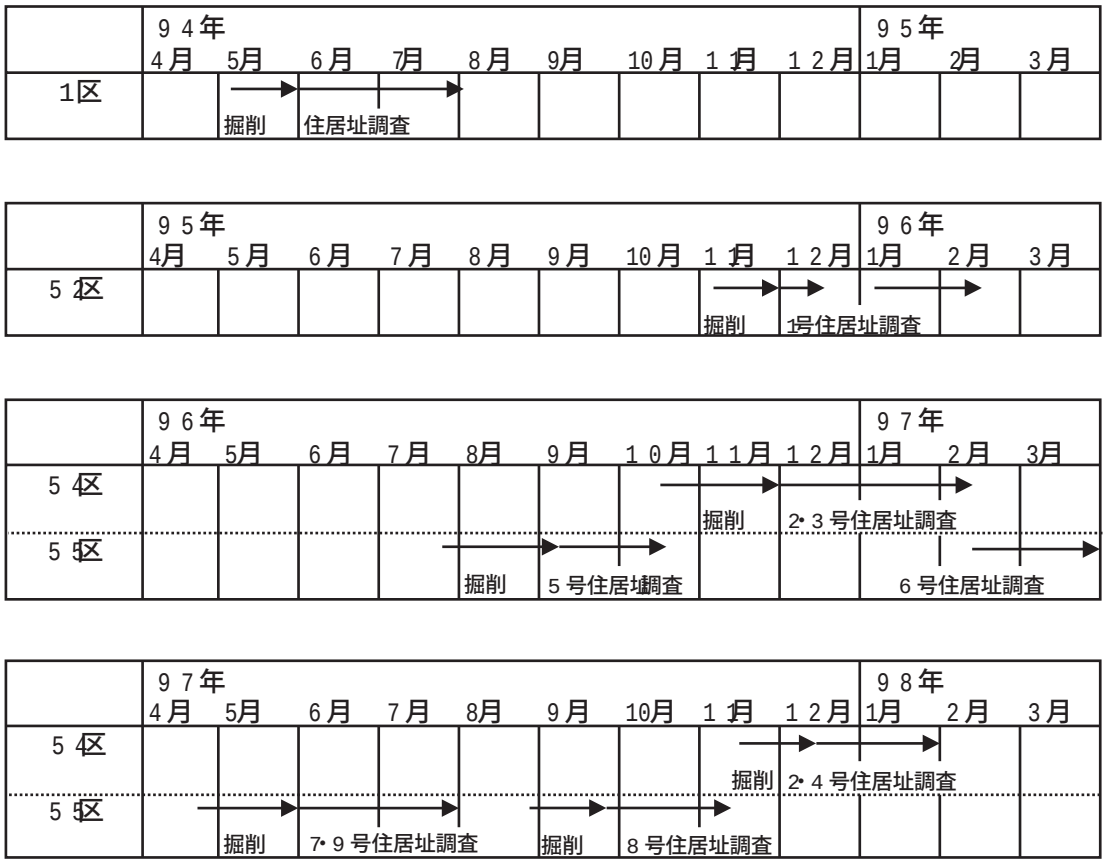
調査協力者（敬称略、順不同）

坪井清足（財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長）　安斎正人（東京大学助手）　小畑弘巳（熊本大学文学部助教授）　村上恭通（愛媛大学法文学部助教授）　清田純一（城南町教育委員会）　鶴嶋俊彦　和田好史（人吉市教育委員会）　萩原博文（平戸市教育委員会）　高木恭二（宇土市教育委員会）　熊本大学文学部考古学研究室　愛媛大学法文学部考古学研究室　福岡大学文学部考古学研究室　九州旧石器文化研究会　熊本市教育委員会文化課　菊陽町教育委員会他

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第２節　調査の経過

調査は平成６年４月から平成10年３月までの４年間を費やした。調査期間が長期に及ぶうえに、調査した時期が各調査区でそれぞれ異なるため、石の本遺跡群全体の調査経過をここで記することはできない。そこで本書に掲載している弥生・古墳時代の遺構が見つかっている調査区についてのみ調査経過を記することにする（第**1**図）。



第**1**図　調査進行図（１区・52区・54区・55区）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第２章　周辺の地理的・歴史的環境

石の本遺跡群は熊本県熊本市平山町字石の本他に所在する。熊本平野の東端に位置する所謂「託麻三山」の一つである小山山（標高186.6m）の東麓と、そこから派生した微高地上に立地している。このあたりは阿蘇外輪山の西端にあたり、北側には白川が南北に蛇行しながら流れており、その両岸には河岸段丘が広がっている。周囲には託麻三山の他にめぼしい山は存在せず、西側の白川右岸に立田山（標高150m）があるくらいで、山頂からは、東は阿蘇の外輪山、西は熊本平野や金峰山を一望することができる（図版**1**）。本遺跡群の東側には俵山から伸びる託麻原台地が広がっており、そこには多くの遺跡が存在している（第**2**・**3**図）。

周辺の弥生時代の遺跡としては熊本市の石原亀甲遺跡（山尻遺跡群）や、対岸には菊陽町の梅ノ木遺跡や六地蔵遺跡等があり、主に白川沿岸に多く立地している。石原亀甲遺跡は弥生時代中期から後期にかけての集落跡で多数の竪穴住居址が検出されている。その中には大型住居の存在が確認されており、神園山北側一帯に広がる大集落を形成していたことが伺える。梅ノ木遺跡や六地蔵遺跡では竪穴住居址のほかに甕棺も検出されている。また、益城町の古閑北遺跡や梨木遺跡は近年、熊本県教育委員会によって調査が行われている。この他にも合志町の轟遺跡等、弥生時代の遺跡が幾つか確認されているが、本調査が行われ、報告されている遺跡は上記の遺跡の他には意外と少なく、そのことが熊本平野東部における弥生時代の研究の停滞を招いているとも言える。

古墳時代の遺跡については、遺物が出土している遺跡（包蔵地）は多く確認されているが、遺物が遺構に伴って出土している遺跡はあまり確認されていない。本調査された遺跡が少ないのも要因の一つであろうが、実際に遺跡の数そのものも多くはない。墳墓の類としては、今石横穴群、弓削小坂横穴群、迫田横穴群、上ノ原箱式石棺等が確認されているが、本格的な調査が行われたものはほとんどない。ただ弓削小坂横穴群については、熊本市教育委員会によって実測調査が行われており、須恵器・土師器が少量出土している。

小山山周辺はかつて田園風景の広がるのどかな地域であったが、宅地造成や国体道路の建設、県民総合運動公園の拡張等で徐々に開発が進み、次第に環境が変化してきている。それに伴い今後、当該地域での発掘調査が増加することが予想される。

参考文献

『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1971年

田辺哲夫編『熊本の上代遺跡－熊本の風土とこころ第二集－』熊本日日新聞社 1980年

『菊陽町史』 菊陽町史編纂室 1995年

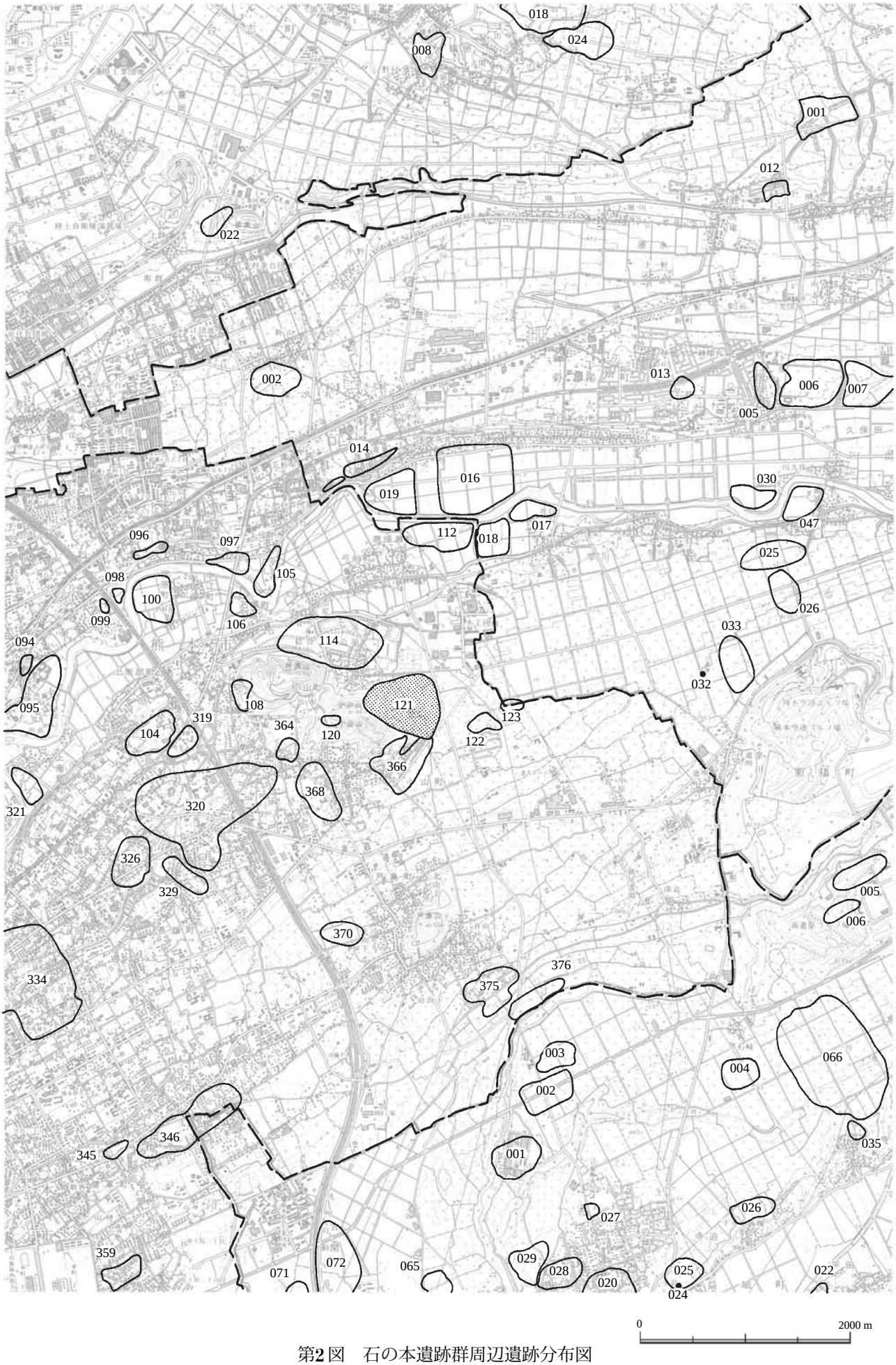
『益城町史 通史編』益城町史編纂委員会 1988年

『合志町史』 合志町史編纂委員会 1988年

『新熊本市史 通史編第一巻 自然・原始・古代』 新熊本市史編纂委員会 1988年

『新熊本市史 史料編第一巻 考古資料』 新熊本市史編纂委員会 1996年

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第2図　石の本遺跡群周辺遺跡分布図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第1表　石の本遺跡群周辺遺跡一覧

合志町（405）

№	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
008	野付	福原　野付	縄文・他	包蔵地		押型文、黒髪式甕棺
018	桑鶴	竹迫　福原	縄文・弥生	包蔵地		昭50年圃場整備、盛土で残す
022	飯高山	槍原　飯高	弥生	包蔵地		
024	轟	豊岡・福原	弥生	包蔵地		黒髪式

菊陽町（404）

№	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
001	原水大人足	原水　大人足	縄文～古代	包蔵地		
002	新山	津久礼　新山	弥生～古代	包蔵地		
005	久保田下原	久保田　下原	弥生～平安	包蔵地		
006	久保田中原	久保田　中原	縄文・弥生	包蔵地		
007	久保田出分上原	久保田　上原	古墳	包蔵地		土師器
012	柳水	原水　柳水	縄文～中世	包蔵地		
013	原水南上原	原水　上原	縄文～中世	包蔵地		
014	今石	津久礼　今石	縄文～中世	包蔵地		
016	津久礼六地蔵	津久礼　梅木	縄文・弥生	石造物		
017	井口下鶴	辛川　下鶴	縄文・弥生	包蔵地		
018	久保	辛川　久保	縄文・弥生	包蔵地		
019	梅ノ木	津久礼　梅の木	弥生	包蔵地		
020	今石横穴群	津久礼　今石	古墳	古墳		９基
025	辛川東原	辛川　東原ほか	縄文・古墳	包蔵地		
026	曲手中原	曲手　中原	縄文～古代	包蔵地		
030	川久保	久保田　川久保	弥生	包蔵地		
032	六道塚古墳	辛川　塚原	古墳	古墳		畑中石材露出する、墳形不明
033	塚原	辛川　塚原	縄文～古墳	包蔵地		
047	西鶴	曲手	縄文・弥生	包蔵地		

熊本市（201）

№	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
094	吉ノ平	龍田町上立田	縄～中世	包蔵地		
095	竹ノ後・芭蕉遺跡群	竜田町上立田竹の後	縄文～平安	包蔵地	竹ノ後遺跡・竹ノ後甕棺群・芭蕉遺跡	竹の後縄文後期土器・合口甕棺・土偶
096	弓削小坂横穴群	龍田町弓削小坂屋敷	古墳	古墳		50基以上
097	弓削前畑	龍田町弓削小坂屋敷	縄～中世	包蔵地		
098	弓削平ノ下Ａ	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地		
099	弓削平ノ下Ｂ	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地		
100	吉原	吉原町殿田	縄文～平安	包蔵地		縄文後晩期（南福寺・中津）、弥生後期、奈良平安在銘土器
104	供合松ノ上	上南部町	縄～中世	包蔵地		
105	法王鶴	龍田町	縄文・弥生	包蔵地		
106	石原町	石原町	縄～中世	包蔵地		
108	神園桜井	長嶺町	縄～中世	包蔵地		
112	鹿帰瀬	鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地	鹿帰瀬河原遺跡	県調査あり
114	山尻遺跡群	龍田町弓削山尻	弥生	包蔵地	山尻遺跡・石原亀ノ甲遺跡・下南部地蔵墓碑	弥生時代を中心とした大集落
120	小山上の山	小山町	縄～中世	包蔵地		
121	石ノ本遺跡群	平山町	旧石器～中世	集落		国体会場
122	御船塚山	平山町	縄～古代	包蔵地		
123	御船塚東	平山町	縄文～古代	包蔵地		
319	神園	長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵地		
320	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	包蔵地	長嶺遺跡・中山叶遺跡・中山五輪塔遺跡（若殿塚遺跡）・馬場	石神碑天文18年銘
321	王田	上南部町王田	縄文～平安	包蔵地		黒髪式合口甕棺
326	南小迫	御領町	縄文～平安	包蔵地		
329	長嶺南	長嶺町南居屋敷	弥生・中世	包蔵地	長嶺広福寺跡 ・長嶺南遺跡・長嶺共有墓地	須玖式甕棺、寛文・延宝・元禄・正徳の記念碑銘
334	乾原・迎八反田	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～平安	包蔵地	乾原迎・八反田遺跡・田の迎遺跡	乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期中心
345	新外Ｂ	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地		
346	小嶺	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地		
359	佐土原	健軍町佐土原	縄文～平安	包蔵地		
364	中山	小山町	縄文～平安	包蔵地		
366	小山上	小山町	弥生	包蔵地		
368	小山山伏塚	小山町	弥生	墳墓	馬場氏裏山板碑	甕棺墓、銅剣出土
370	戸島京塚	戸島町	縄文～中世	包蔵地		
375	戸島桑鶴	戸島町	縄文～平安	包蔵地		
376	下佐土原	戸島町	縄文～平安	包蔵地		

益城町（443）

№	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
001	小久保	上小久保　下小久保	縄文～中世	包蔵地		
002	宮園B	木山　遠見塚ほか	縄文・弥生	包蔵地		縄文～、弥生中期土器
003	遠見塚	木山　遠見塚	縄文～古代	包蔵地		
004	八久保	八久保	古墳・古代	包蔵地		
005	上面ノ平	田原　上面ノ平	縄文～中世	包蔵地		
006	上石岸原	田原　上石岸原	縄文～中世	包蔵地		
020	宮園Ａ	木山　遠見塚ほか	弥生	包蔵地		弥生中期土器
022	平田	平田　境	弥生	包蔵地		弥生甕棺
024	上ノ原箱式石棺	寺迫　上ノ原	古墳	埋葬		
025	上ノ原	寺迫　上ノ原	弥生	埋葬		弥生甕棺群
026	遠見塚	寺迫　遠見塚	古墳	古墳		円墳、箱式石棺
027	下辻	木山　下辻	縄文～中世	包蔵地		
028	辻	宮原　辻	縄文～中世	包蔵地		
029	宗曽利	安永　宗曽利	縄文～中世	包蔵地		
035	迫田横穴群	寺中　上神内	古墳	古墳		益城町史に名称あり
065	大辻	馬水　大辻	縄文～平安	包蔵地		
066	寺中	寺中	縄文～平安	包蔵地		
071	梨木	広崎　梨木	縄文～弥生	包蔵地		
072	古閑北	古閑　崎久保・横道	縄文～弥生	包蔵地		

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第3図　石の本遺跡群調査区位置図及び割付け図（網掛け部は今回報告分）

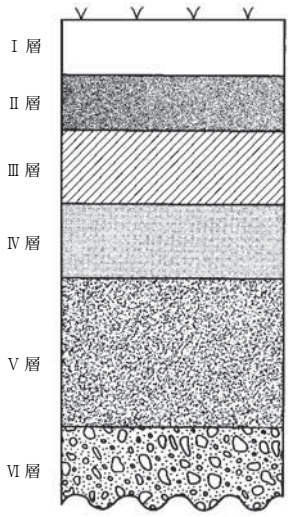
なお、本遺跡群の基本層序については、各調査区で異なる様相を呈しているため、大まかな分層に留めておく（第4図）。層位の詳細な報告は別稿に譲ることとする。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

Ⅰ層（表土）　　耕作土。調査前は畑であったため、多くの撹乱坑が確認された。

Ⅱ層（黒褐色土）　クロボク土。水はけが良く、粘性に乏しいため、乾燥するとよく土ぼこりを舞い上げる。熊本平野ではよく確認される土である。この層まで中・近世の遺物を含んでいる。

Ⅲ層（黄褐色土）　所謂アカホヤ火山灰を含む土。但し純粋なアカホヤ火山灰ではなく二次堆積土であろう。細かな相違からさらに幾つかに分層できる。本遺跡群では主にこの層から遺構の確認を行った。弥生時代の住居址もこの層で検出したものである。ただ小山山東麓（52･54･55区）ではほとんど確認されなかった。



第4図　石の本遺跡群基本層序図（概略）

Ⅳ層（黒褐色粘質土）　粘性に富んだ締まりのある土。縄文早期の文化層を含んでいる。

Ⅴ層（暗褐色土）　Ⅳ層同様、粘性のある締まりのある土。調査区によっては３～７層に分層できる。その中には姶良Ｔｎ火山灰を含む層が確認されている。またその層の前後に１～３層の旧石器時代の文化層が確認されている。

Ⅵ層（赤色粘質土）　Ⅴ層よりさらに締まりのある粘質土。従来鳥栖ロームと呼ばれていたもので、実際は風堆積土（レス）である。漸移層とその下の層に分層できる。旧石器時代の文化層が確認されている。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第３章　調査の成果

第１節　各時代の概要

石の本遺跡群は、旧石器時代から中・近世にかけての遺構・遺物が分布する複合遺跡である。各時代によって分布域が異なるため、時代毎で取上げる調査区が特定されている。凡例で述べたように、本書では弥生時代と古墳時代について取り上げている。なお、各調査区の割付けとグリッドの配置については、第３図のとおりである。

それでは各時代の概要について簡単に述べておきたい。

〔弥生時代〕（第5図）

弥生時代の遺構は石の本遺跡群の中では、東端で確認されている。調査区で表すと１区にあたる。遺構としては竪穴住居址を１軒検出したが、包含層遺物として52区より弥生土器片がまとまって出土した。器種としては壷や甕、それにジョッキ形土器とおぼしきものも確認された。その中には線刻を施した土器片も１点出土している。遺構の存在を窺わせるものの、削平を受けているためか、遺構らしきものは確認されなかった。また他の調査区からも破片が数点出土しているが、いずれも小破片であった。

〔古墳時代〕（第6図，図版2）

古墳時代の遺構は石の本遺跡群でも西側、つまり小山山東麓に集中している。調査区で表すと52､54､55区にあたる。遺構としては、竪穴住居址が計９軒確認されている。内訳は52区で１軒、54区で３軒、55区で５軒、となるが、その中には線刻を施した土器が、ほぼ完形を保って出土した住居址も２軒含まれている。55区の南側は調査開始時には既に周囲より１m近く削平されており、また遺構を確認した調査区でも少なからず上面を削平されているため、実際にはもっと多くの住居址が存在したものと考えられる。包含層遺物として金環が出土しており、周囲に古墳が存在した可能性もある。なお今回の調査では、掘立柱建物跡は確認できなかった。

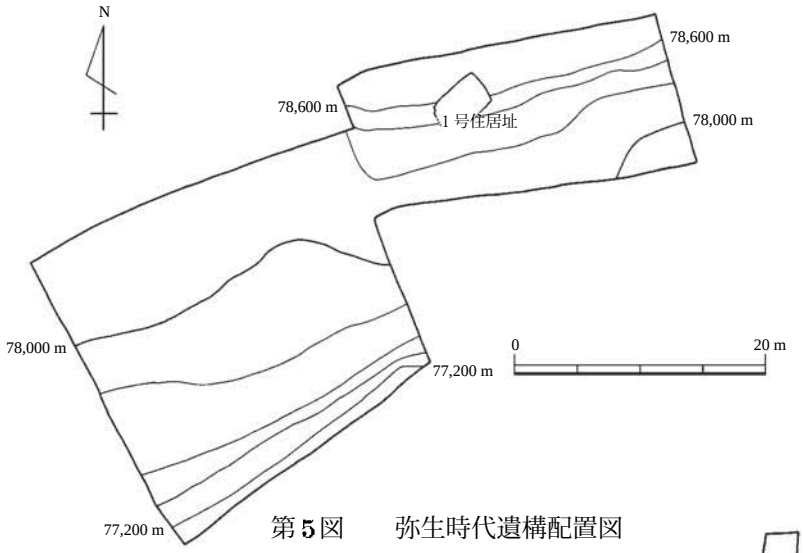
第２節　弥生時代

１　１号住居址

遺構・埋土（第7図，図版3）

調査区の中心部に位置し、南北方向に長い長方形を呈した住居址である。住居址は南側に向かって斜面に沿うように削平されており、長・短辺共に定かではないが、長辺が軸（Ａ－Ａ′）上で4.6m、短辺が軸（Ｂ－Ｂ′）上で2.6ｍ前後はあったものと推測される。上部をかなり削平されていたが、検出面から床面までの深さは最大26cmを測る。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。柱穴は、３個検出し

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第 5 図　　弥生時代遺構配置図

第 6 図　　古墳時代遺構配置図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

たが不規則な配列をしている。また床面には貼り床等の整地は施されていない。ベッド状遺構があったかどうかは定かでないが、当該時期の竪穴住居址内にはよく確認されており、作られていた可能性がある。住居址内に炉跡は確認されなかった。

住居址の埋土は、基本的に黒褐色土であるが、炭化物や焼土を多く含む層（埋土１層）と、粘質があり炭化物や焼土を少し含む層（埋土２層）に分けられる。床面直上に出土遺物はなく、すべて埋土１層中であり、後世の混入遺物の可能性が高い。

出土遺物

住居址内からは、弥生土器片が数点出土しているが、いずれも破片であり全体の形態を復元・図示するには至らなかった。

２　包含層遺物（第8・9図，図版4）

弥生時代の遺構は、上記の１号住居址のみであるが、包含層資料として１区の他に52区、55区、56区から弥生時代の遺物が出土している。完形を保つものはないが特徴的なものを列挙した。

弥生土器（1~15）

器種としては甕、壷、ジョッキ形土器が確認されている。ただ前述したようにいずれも破片資料のみで、全体の形状を復元できるものはない。

〔甕〕（1・2）

1は、甕で口縁部と胴部の一部を残している。口縁はやや外湾し、口縁端部はやや丸みを帯びている。胴部は下半部が欠損しているが、長胴を呈していたと考えられる。内外面共にハケ調整が施してある。**2**は、胴部の一部のみ残っているが、甕の胴部であろうか。内面はハケ調整の後ナデ、外面はハケ調整を施し、突帯付近は突帯接合後、横ナデを施す。貼付け突帯を一条巡らせているが、接合時の爪の押圧痕が残っている。

〔壷 口縁部〕（3~6）

3~6は、壷の口縁部であるが、形態は長頸や袋状等様々である。**3**は、口縁部の破片から復元したが、口縁が漏斗状に広がる壷であろう。器面が風化しており、調整痕ははっきりしないが、内面から口縁端部まで横ナデ、外面はハケ調整の後横ナデと考えられる。口縁端部には刻み目を上下二段にわたって巡らせている。**4**は、頸部以下を欠損しているが、その形状から長頸壷である。内面はナデ、外面は縦方向のハケ調整の後ナデを施す。やや外反しながら立ち上がり、口縁端部は外傾している。**5**は、頸部以下を欠損している袋状口縁を有する壷で、頸部内面はナデ、口縁内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁の膨らみはやや角張っており、頸部には沈線を１条巡らせ、口縁部には彩色を施した痕が見られる。**6**は、口縁の一部で、内外面には横ナデを施す。甕の可能性もあり、器種ははっきりしない。くびれ部に断面三角形の突帯を巡らす。

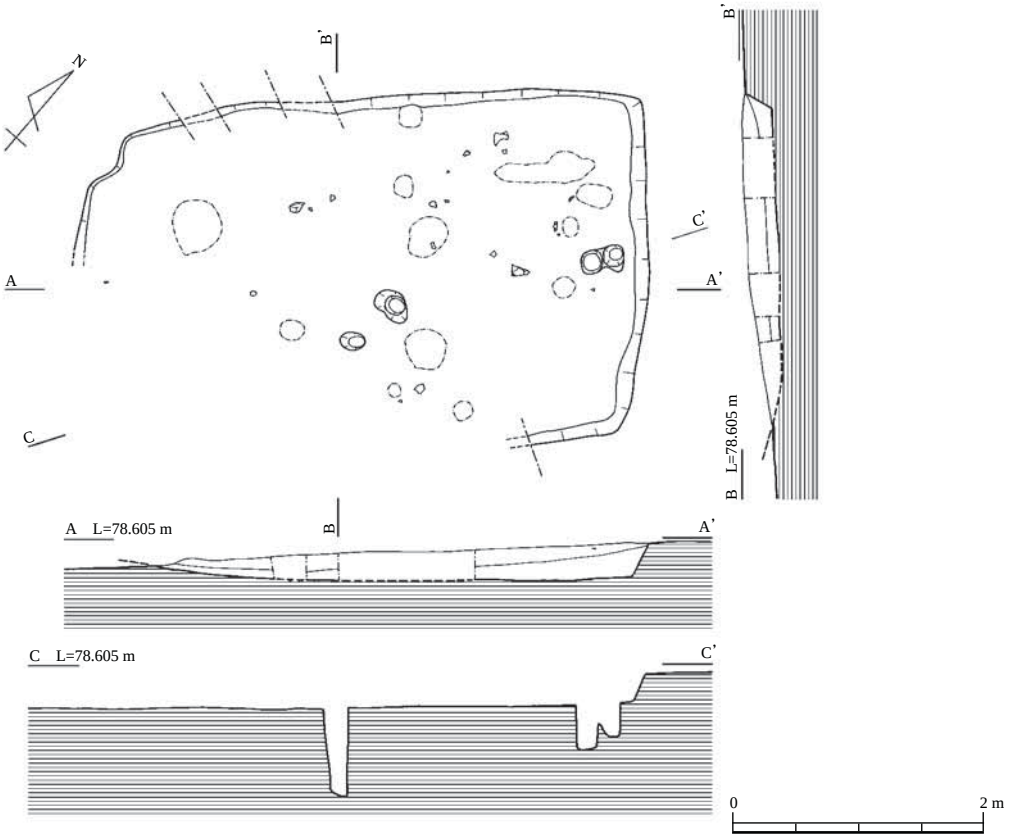
〔壷 胴部〕（7~14）

7~14は、いずれも胴部片で、実際の器形がはっきりしないものも多いが、ここでは一応壷としておく。反転復元可能なものは１点に過ぎず、多くは断片的な資料である。ここでは線刻や突帯等が施されているものを取り上げた。突帯の数や形態で幾つかのグループに分けられるが、大きく分けると一条突帯（**7~10**）と二条突帯（**11~13**）、そしてそれ以外（**14**）に分類できる。さらに突帯に刻み目を施すものとそうでない

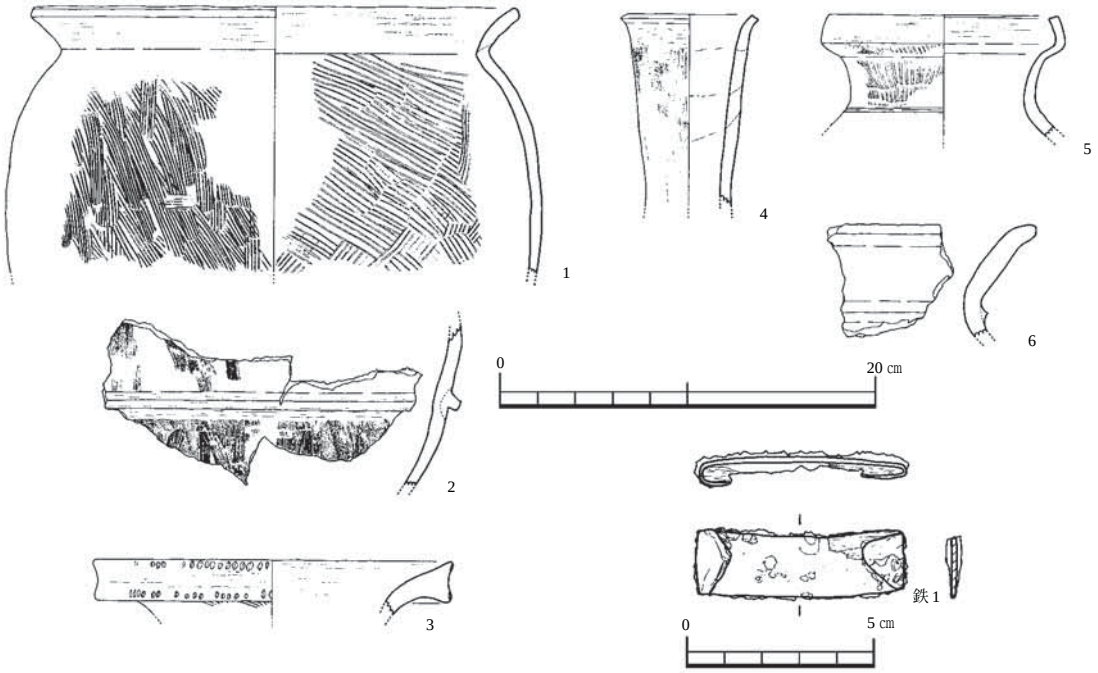
Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

ものがあり、遺物の量の割にはバリエーションに富んでいると言える。

7は、胴部の一部で、上端に小さな断面三角形の突帯が見られる。外面にはハケ調整を施し、その後ヘラ状工具による線刻画が確認されている。全体の形状は不明だが、魚をモチーフにしているようにも見える。**8**は、



第**7**図　　弥生時代１号住居址実測図



第８図　　弥生時代包含層遺物実測図（１）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

口縁部と底部を欠損している壷で、くびれ部には断面三角形の突帯を一条巡っている。内面はハケ調整の後にナデを施し、外面はハケ調整のみ施してある。**9**・**10**は、胴部に一条の刻み目突帯を持ち、内面はハケ調整を施す。外面は**9**ではハケ調整の後ナデ、**10**ではハケ調整のみ施し、突帯付近は横ナデされている。共に断面三角形の貼付け突帯であるが、**9**の方がやや丸みを帯びている。**11**～**13**は、胴部に二条の突帯を持ち、内面はハケ調整、**11**では突帯の裏側のみその後横ナデを施す。外面は**11**・**12**ではハケ調整の後ナデ、**13**ではタタキの後ハケ調整を施し、突帯付近は横ナデされている。なお**13**は、下の突帯のみ刻み目を施している。**14**は、胴部上位にボタン状の浮文があるもので、本遺跡群からはこの１点のみ出土している。内外面共にハケ調整の後ナデを施す。破片であるため全体の形状は定かでないが、残存部からして比較的大型の壷であったと考えられる。

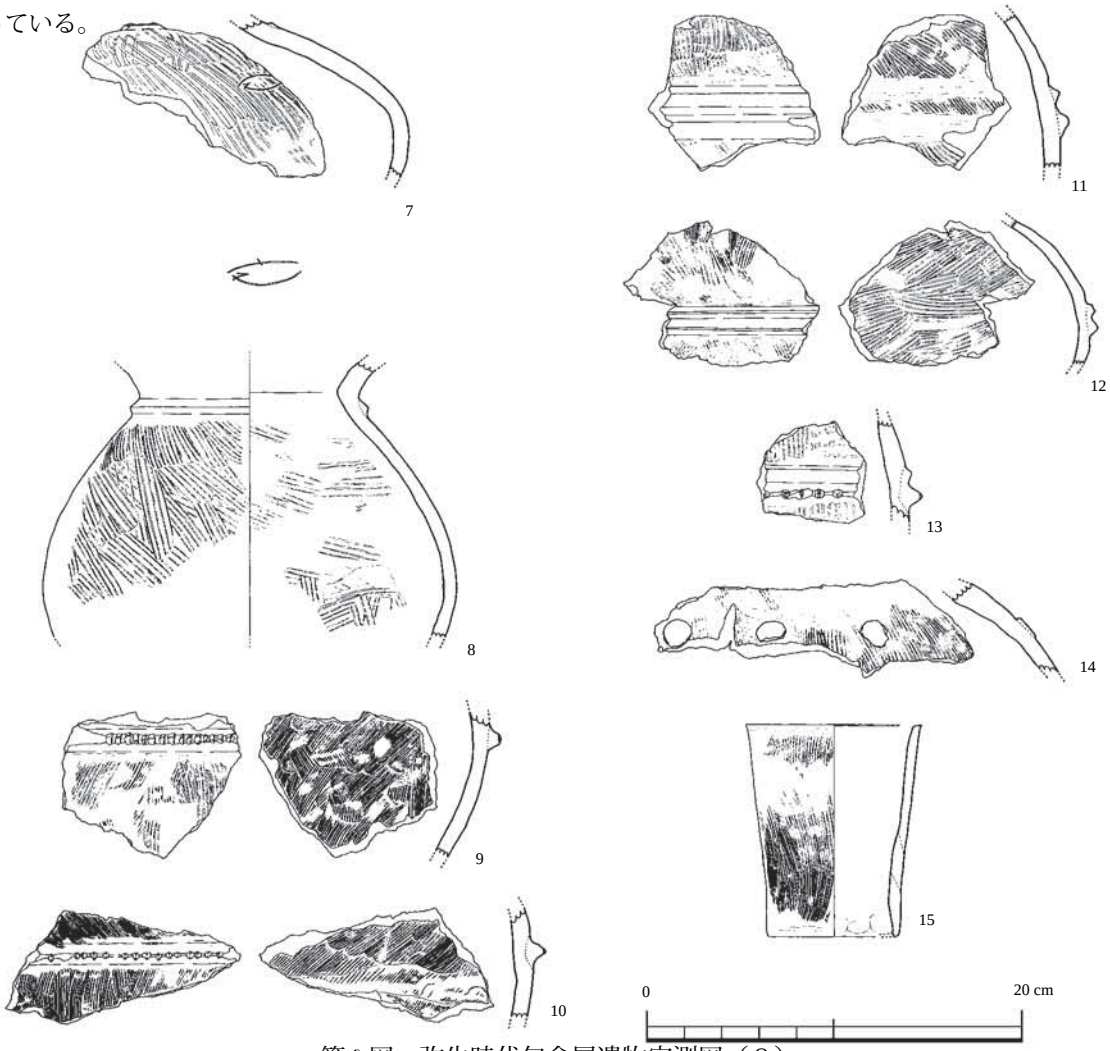
〔ジョッキ形土器〕（15）

15は、ジョッキ形土器の破片とおぼしきもので胴部内面はナデ、口縁と底部内面は横ナデ、外面は縦方向のハケ調整で口縁と底部はその後横ナデを施す。外面には彩色を施した痕跡がある。取っ手は欠損したのか確認されなかった。

鉄製品（鉄1）

鉄製品としては鉄鎌が１点出土している。当該時期と比定できるものはこれ１点のみである。

鉄1は、鉄製手鎌である。所々錆が多く付着しているが、ほぼ完全な状態で出土した。刃部長5.6cm、基部長5.5cm、幅1.6cm、厚さ0.1～0.15cmを測る。わずかに刃部が広くなっている。また基部には木片が残っている。



第９図　弥生時代包含層遺物実測図（２）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第3節　古墳時代

1　1号住居址

遺構・埋土（第10図，図版5）

丘陵の先端部に立地し、52区東端に位置している。東側は断層によってずれ落ちており、平面プランははっきりしない。ただ柱穴の配置から推測すると東西方向にやや長い、ほぼ方形を呈した住居址と考えられる。長辺は軸（Ａ－Ａ′）上で4.4m以上、短辺は軸（Ｂ－Ｂ′）上で4.7mを測る。検出面から床面までの深さは最大32cmである。内側の壁沿いには幅17～30cm、深さ10cm前後の溝が巡らしてある。溝内にはピットが点在しており、壁材を支えていた杭痕と推測される。柱穴は計６個検出され、柱の痕跡も確認された。他にも幾つかピットを検出したが、柱穴と考えられるのは前述した６個のみであった。床面には貼り床が施されていたが、約１／３は削平されている。炉跡は住居址中央からやや西側に寄った所に１基検出された。

住居址の埋土は暗褐色土を基調としているが、埋土３層は黒褐色土で炭化物、焼土を含んでいる。出土遺物の多くはこの埋土３層中に含まれている。埋土４・５層は、それぞれ周溝とピットの埋土で基本的には同じ土である。埋土３層は炭化物・焼土を多く含んでいるが、住居焼失によるものかは疑問である。

出土遺物（第11図，図版14）

本住居址からは、土師器片が多数出土した。しかし接合の結果、実測可能なものは計５点に止まった。内訳は甕が２点、壷が３点で、うち２点は破片から器種を想定している。

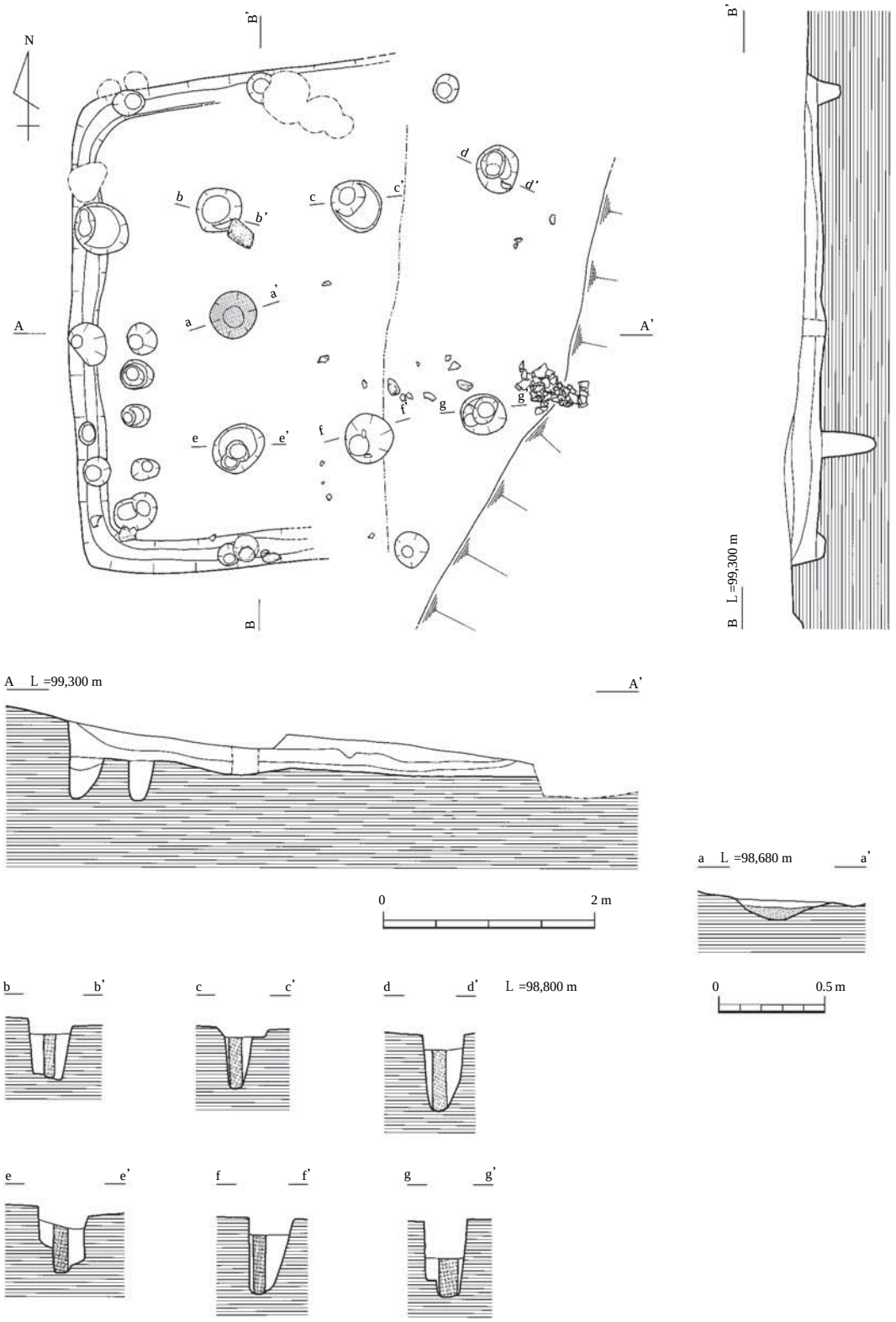
〔甕〕（1・2）

1は、口縁部と胴部の一部しか残っていないが、その形態から甕と考えられる。口縁内面はハケ調整を施しており、口縁端部はハケ調整の後横ナデを施している。くびれ部は強く横ナデしているため、凹線状に窪んで見える。2は、ほぼ完形に近い甕である。南側の壁際に口縁を上にして出土した。口縁はやや厚みを帯びており、直線気味に立ち上がる。胴部内面はヘラ削りを施しているが、胴部上位には接合痕が残っており、ヘラ削りが及んでいない。外面はハケ調整で、口縁から胴部上位にかけてハケ調整の後横ナデを施している。また胴部の大半に煤が付着しており、煮炊きに用いていたと推測される。

〔壷〕（3~5）

3は、口縁部と胴部の一部しか残っていないが、その形態から小型丸底壷と考えられる。口縁は内湾気味に立ち上がる。胴部内面はくびれ部までヘラ削りは及んでいない。外面は口縁から胴部上位まで横ナデを施している。4は、全体の約１／３を欠損している壷で口縁はやや厚みを帯びており、直線気味に立ち上がる。内面は胴部中位までヘラ削りを施しているが、胴部上位にはほとんどヘラ削りは施しておらず、接合痕が明瞭に残っている。外面は、口縁部から胴部上位にかけて横ナデ、それより下位はハケ調整を施している。外面には煤が付着している。5は、大型の壷で口縁はわずかに外湾している。口縁内外面はハケ調整で、外面は二次調整として横ナデを施している。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整を施している。貯蔵用の壷であろうか。本遺跡ではこのような大型の土器はほとんど出土していないが、破片ではあるものの、２号住居址から類似した壷が１点出土している。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第10図　古墳時代１号住居址実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第**11**図　古墳時代１号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

２　２号住居址

遺構・埋土（第**12**図，図版**6**）

54区と55区の境に位置している。平面プランは南北方向に長い長方形を呈している。長辺は軸（Ａ－Ａ′）上で5.9ｍ、短辺は軸（Ｂ－Ｂ′）上で4.1ｍを測る。検出面から床面までの深さは最大24cｍである。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。撹乱坑が多く柱穴の検出に苦労したが、柱穴とおぼしきものを４個確認した。床面には貼り床は施されていない。床面や壁面は熱を受けたためか、広範囲にわたって赤く変色している。なお炉跡は検出されなかった。

住居址の埋土は粘質を持たない暗褐色土（埋土１層）と同じく粘質を持たない黒褐色土（埋土２層）に分けられる。どちらも炭化物、焼土を含んでいるが、特に埋土２層には多量の炭化物、焼土を含んでいた。床面や埋土の状況から、本住居址は焼失した可能性が高い。

出土遺物（第**13**図，図版**15**）

多くの炭化物、焼土に混じって土師器片が出土している。その多くは埋土２層中に含まれるが、なかには埋土１層に含まれるものもある。器種は壷、甕の他に坏、高坏が確認されている。ここでは接合できた６個体分の土器を図示しておく。

〔坏〕（6）

6は、底部が半球形を呈する坏である。底部内面はヘラ削りの後ナデ、口縁は横ナデを施す。外面底部はヘラ削りの後ナデ、体部はハケ調整を施す。口縁は強く横ナデされており、凹線状の窪みが見られる。

〔高坏〕（7）

7は、口唇部と脚部を欠損した高坏である。口縁部と体部の境には稜が明瞭に残る。内面底部は不定方向のナデ、口縁部は横ナデを施す。底部には脚部と坏部の接合痕が残っている。外面はハケ調整の後横ナデを施す。住居址内に接合する破片は確認されなかった。

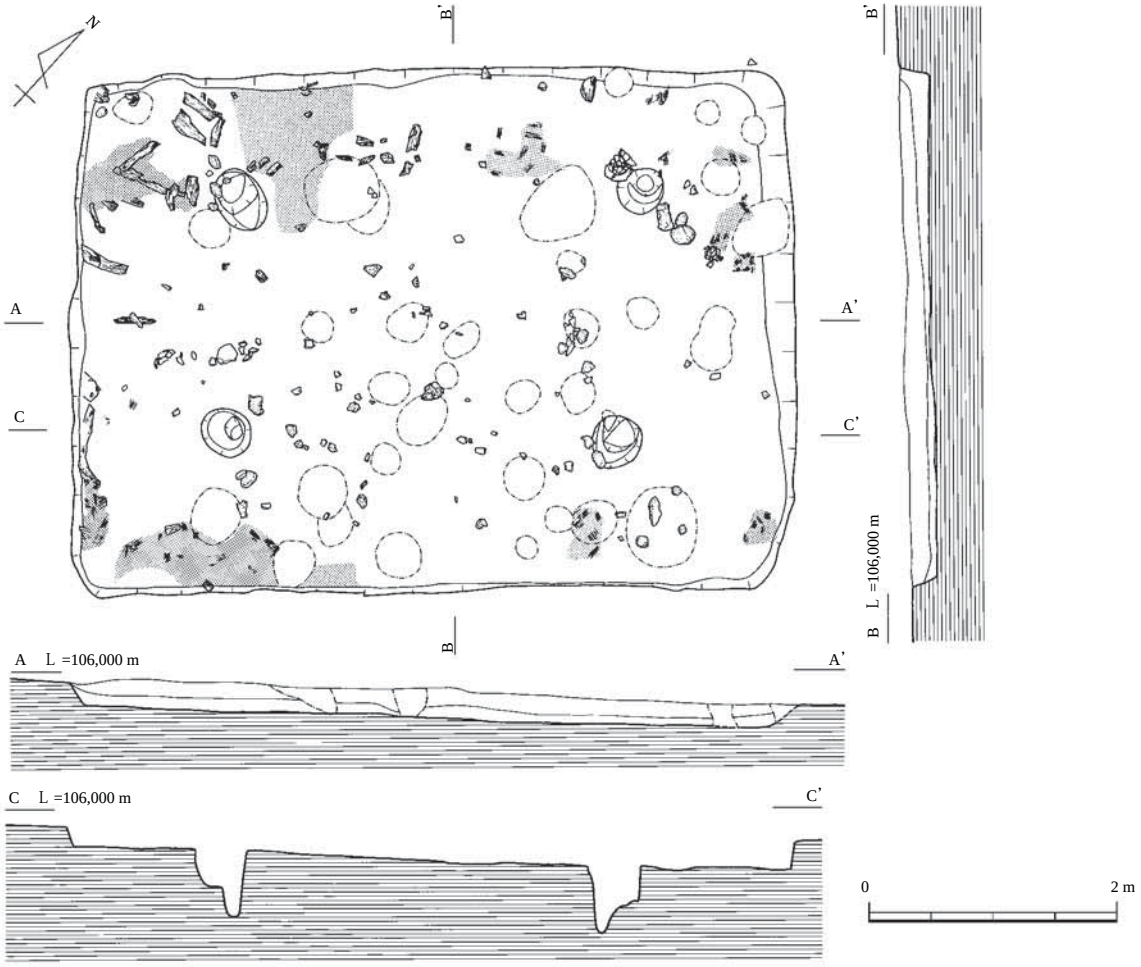
〔壷〕（8・9）

8は、胴部下位を欠損している壷である。口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁端部では逆に外湾気味に仕上げている。胴部内面はヘラ削りの後ナデ、口縁部は横ナデを施している。調整が不十分なせいか、くびれ部には接合痕が残っている。外面は胴部中位までは横ハケの後ナデ、それより上位には縦ハケの後横ナデを施している。胴部中位には煤らしきものが付着している。**9**は、くびれ部と口縁部の一部しか残っていないが、口縁部の形状から大型の壷と考えられる。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整、口縁内外面は横ナデを施すが、くびれ部には軽いナデか未調整のため接合痕が残る。前述したように１号住居址でも類似した壷が出土している。

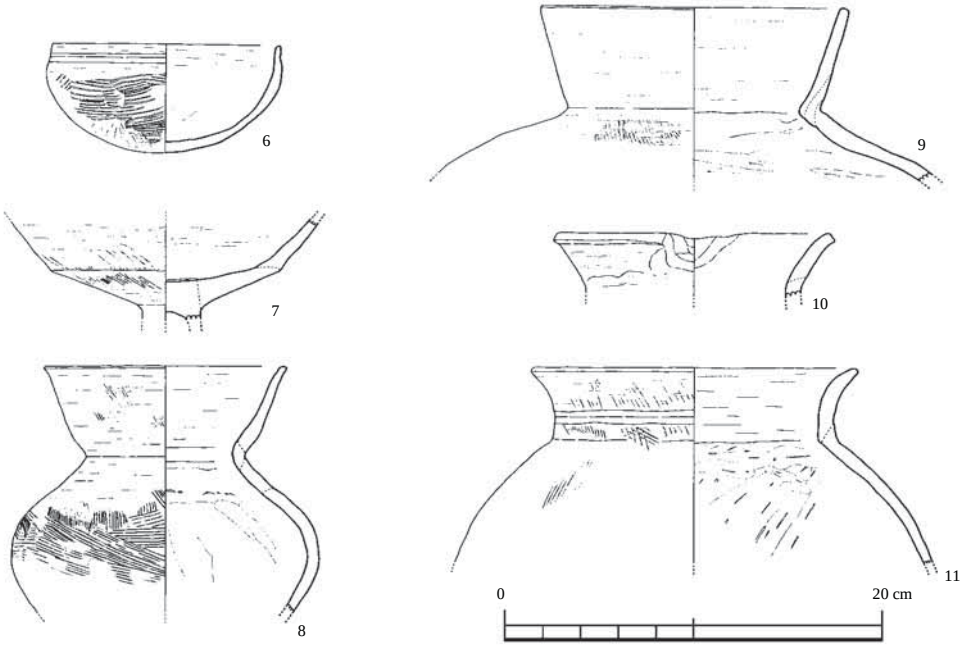
〔甕〕（10・11）

10は、口縁部以外欠損しているものの、その形状からして甕と考えられる。内外面共に横ナデを施してある。口縁端部は外傾している。また部分的に歪んでおり、外面には接合痕も残ったままである。**11**は、口縁部と胴部の破片である。口縁は外湾しており、くびれ部には暗文状の沈線が一条入っている。胴部内面はヘラ削り、口縁は横ナデを施している。外面は基本的にハケ調整の後ナデという行程を経ている。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第12図　古墳時代２号住居址実測図



第13図　古墳時代２号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

３　３号住居址

遺構・埋土（第**14**図，図版**7**）

２号住居址のほぼ真南に位置する。平面プランは方形を呈している。規模は軸（Ａ－Ａ′）上で4.3m、軸（Ｂ－Ｂ′）上で3.8mを測る。検出面から床面までの深さは最大で20cmである。内側の壁沿いには幅10～30cm、深さ６cm前後の溝が東側を除いた三方に巡らしてある。溝内にはピットが点在しており、壁材を支えていた杭痕と推測される。また溝が巡っていない東側に入り口があったと考えられる。柱穴は計４個確認された。床面には貼り床等の整地は施されていなかった。２号住居址同様床面は赤く変色しているが、２号住居址ほど赤くはない。炉跡は、住居址中央からやや南側に寄った所に１基検出された。

住居址の埋土は炭化物、焼土を多量に含む黒褐色土（埋土１層）とそれらを含まない褐色土（埋土２・３層）に分けられる。埋土１・２層はやや粘質を持っているが、埋土３層はあまり粘質を持っていない。壁際には２号住居址同様、比較的原形を留めた炭化物が確認されている。建築部材の一部ではないかと考えられるが、多くは検出されていない。埋土２・３層には炭化物、焼土を含まないため、本住居址は埋土１層堆積前後に焼失したものと推測される。また出土遺物の多くは埋土１層中に含まれる。

出土遺物（第**15**図，図版**16**）

埋土１層中から土師器片が出土したが、図示できたのは完形品を含めて４点のみである。器種は壷と甕で、壷の中には小型丸底壷とおぼしきものも含んでいる。

〔**壷**〕（**12**・**13**）

12は、くびれ部に線刻をもつ小型丸底壷である。或いはその形状から手捏ね土器と呼称した方がよいかもしれない。器面の風化が激しく、内外面の調整ははっきりしないが、胴部内面はヘラ削りの後ナデ、口縁はハケ調整の後横ナデを施していると考えられる。また胴部外面はハケ調整の後ナデ、口縁はハケ調整の後横ナデを施している。線刻は、ヘラ状の工具でくびれ部に短い縦線を巡らせた後、それらを二分するように一周させている。**13**は、全体の約１／３を欠損した複合口縁壷である。口縁と擬口縁との稜は丸みを帯びており、複合口縁というよりは、むしろ単純口縁に近い形状を呈している。胴部内面はくびれ部までヘラ削りを行い、口縁部内外面はハケ調整の後横ナデを施している。胴部外面はハケ調整の後ナデを施している。なお**12**と**13**は重なるように出土しており、**13**の取上げ後**12**が見つかっている。両者の関係ははっきりしないが、伴うものと考えられる。

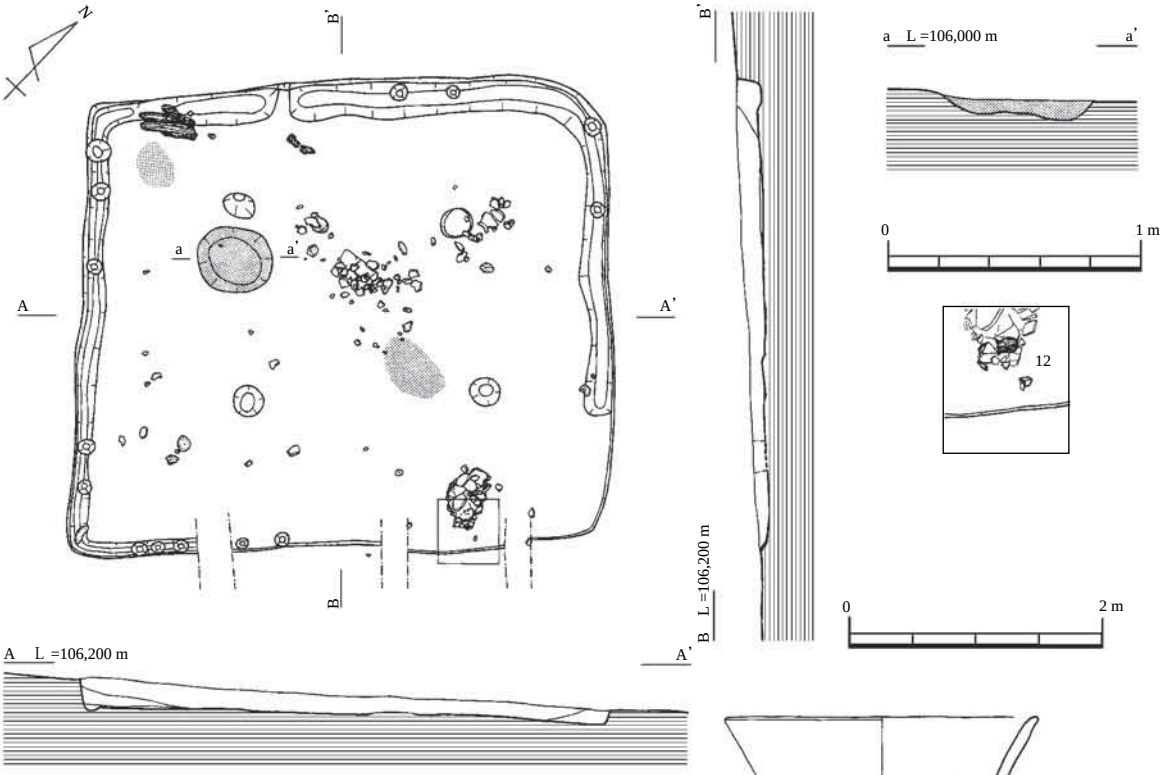
〔**甕**〕（**14**・**15**）

14は、口縁部の一部と胴部の約１／３を欠損した甕である。器面は風化しており、内外面の調整痕は確認しにくいが、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整、口縁内外面は横ナデを行っていたと考えられる。口縁は直線気味に立ち上がり、くびれ部内面に接合痕が残っている。**15**は、胴部中位から上を欠損しており、器種の特定が困難であるものの、胴部の形状から甕か壷と考えられる。器面が風化しており、調整痕の確認は難しいが、内面はヘラ削りで底部はナデ、外面はハケ調整を施している。底部外面は窪んでいるが、器面の状態からこれは廃棄後に欠損したものではなく、使用時から欠損していたと考えられる。意図的なものか偶発的なものかは明らかでないが、あるいは底部を穿孔するために施したものかもしれない。

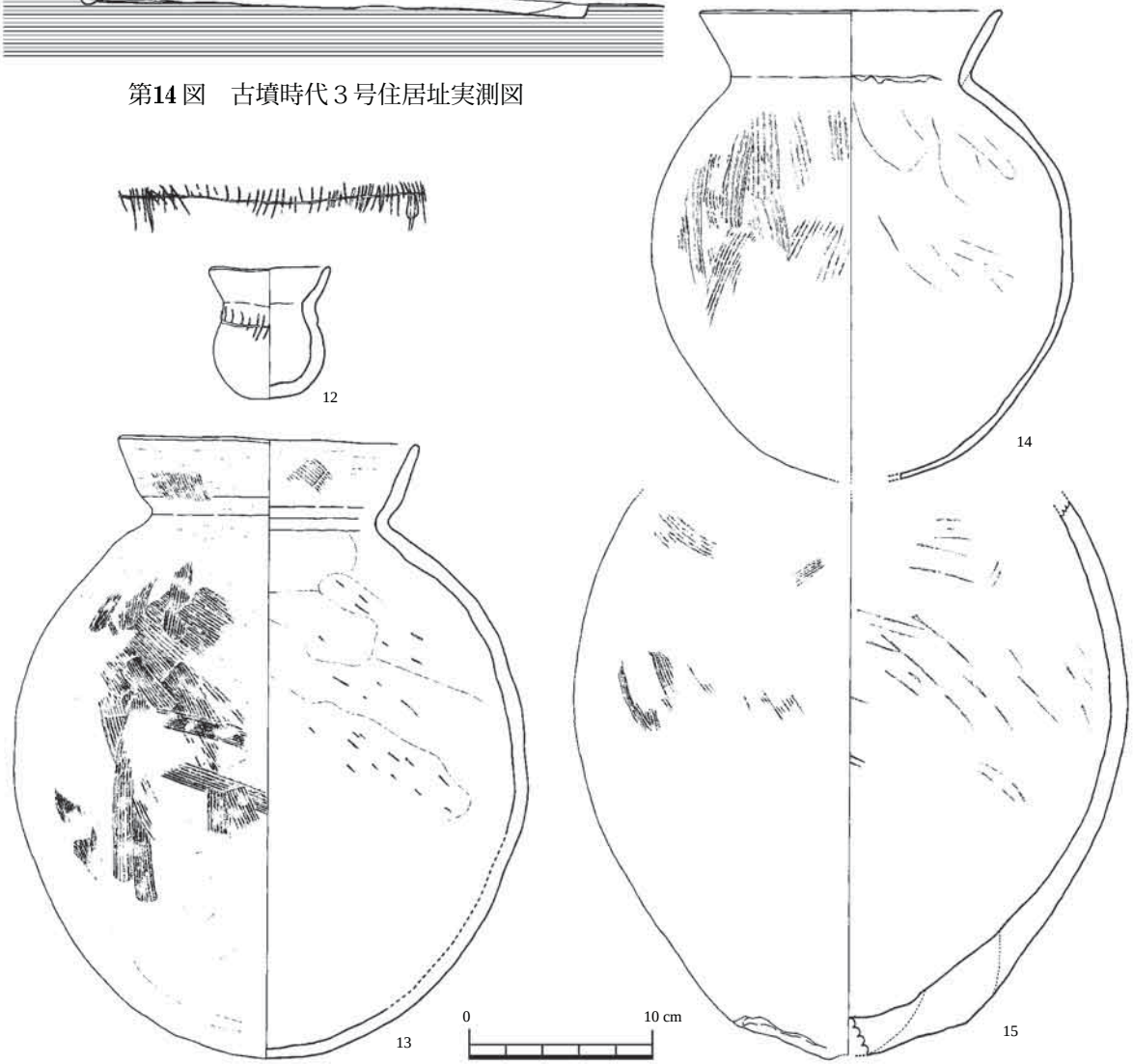
４　４号住居址

遺構・埋土（第**16**図，図版**8**）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第**14**図　古墳時代３号住居址実測図



第**15**図　古墳時代３号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

54区の北側に位置し、２号住居址の西南方向にある。東側が削平されているが、柱穴の配列から平面プランは方形を呈していたと推測される。規模は軸（Ａ－Ａ′）上で3.0m、最大3.5m、軸（Ｂ－Ｂ′）上で4.3mを測る。検出面から床面までの深さは14cmである。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。柱穴は計４個確認された。床面には貼り床等の整地は施されていなかった。炉跡とおぼしき焼土坑が、住居址中央からやや西南側に寄った所に１基検出された。

住居址の埋土は、上面を削平されているため保存状況は良好ではないが、大きく２層に分けられる。粘質を持っている炭化物、焼土を少量含んだ黒褐色土（埋土１層）と、粘質をあまり持たない炭化物、焼土を含んだ暗褐色土（埋土２層）であるが、壁が崩れて流れ込んだと考えられる暗褐色土（埋土３層）も壁際に堆積しており、層位として確認されている。ただ埋土３層は壁際の一部にしか堆積しておらず、遺物も含んでいない。実質的には埋土１・２層が本住居址の埋土と言えよう。

出土遺物（第**17**図，図版**17**）

埋土１・２層中より土師器片が出土しているが、完形品を含めて計５個体分の土師器が図示できた。

〔壷〕（16）

16は、ほぼ完形の小型丸底壷である。住居址南側から出土している。３号住居址から出土している**12**と同様、手捏ね土器とも言うべき土器で、口径と胴部径がほぼ同じ大きさになっている。胴部外面に線刻が施されている点でも**12**と同様である。線刻は基本的に円と弧を基調とし、胴部を一周するように巡らされている。底部付近にはそれらとは別に沈線を一条巡らされている。

〔坏〕（17）

17は、破片から復元したが坏と考えられる。底部は平底に近い半球形を呈している。器面がやや風化しているが、体部内面はヘラ削りの後ナデ、口縁は横ナデ、体部外面はハケの後ナデ、口縁は横ナデを施している。口縁はやや外反している。

〔高坏〕（18）

18は、坏部の約１／２のみ残る高坏である。器面が風化しているが、体部内面は不定方向のナデ、体部外面はハケの後ナデ、口縁部は横ナデを施したと考えられる。口縁部と体部の境の稜はほとんど見られず、わずかに一本線がひける程度である。口縁はわずかに外反している。

〔甕〕（19・20）

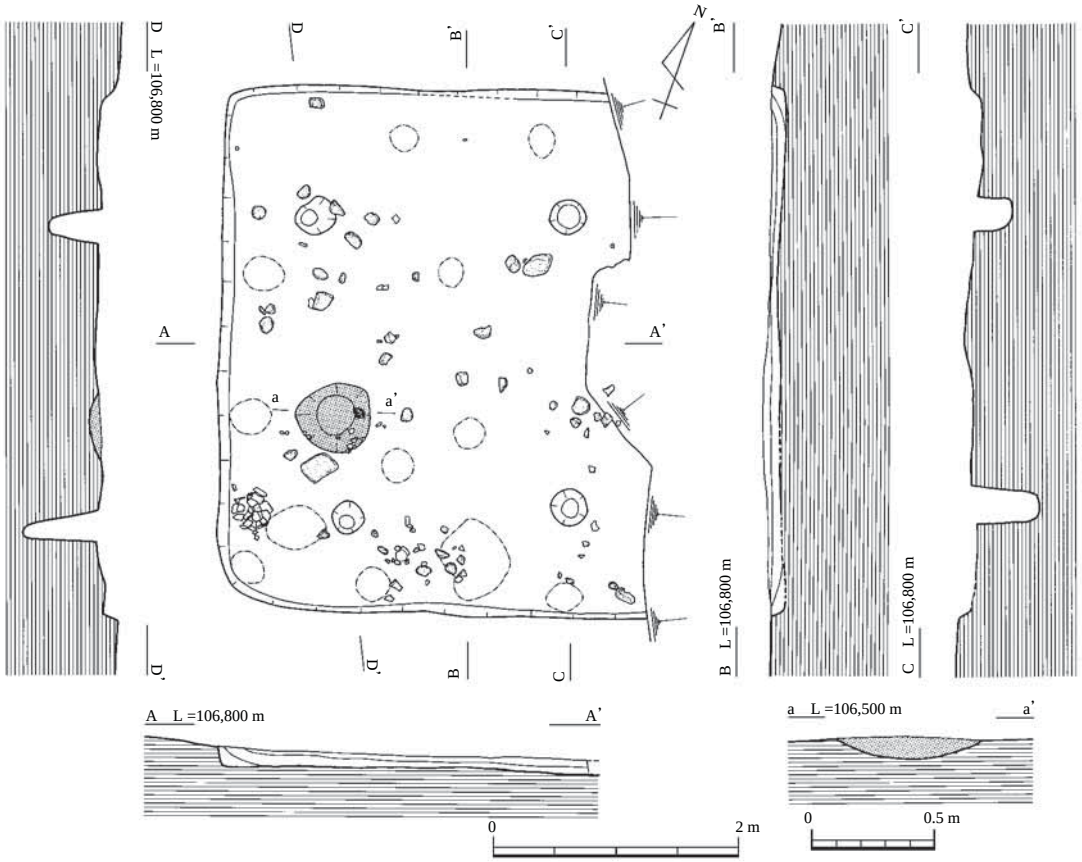
19は、口縁部と胴部の一部のみ残っている甕で、口縁は内湾気味に立ち上がっている。口縁端部はやや丸みを帯び、外傾している。くびれ部に２個所接合痕を確認している。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整、口縁内外面は横ナデを施している。**20**は、口縁部の約１／２と胴部の約５／６を残す甕である。住居址西側の壁際から出土しており、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整、口縁内外面はハケの後横ナデを施している。土器そのものは全体的にやや歪んでおり、胴部外面は煤が付着している。胴部内外面も変色しており、かなり熱を受けていたことが判る。おそらく煮炊きに用いたと考えられる。

５　５号住居址

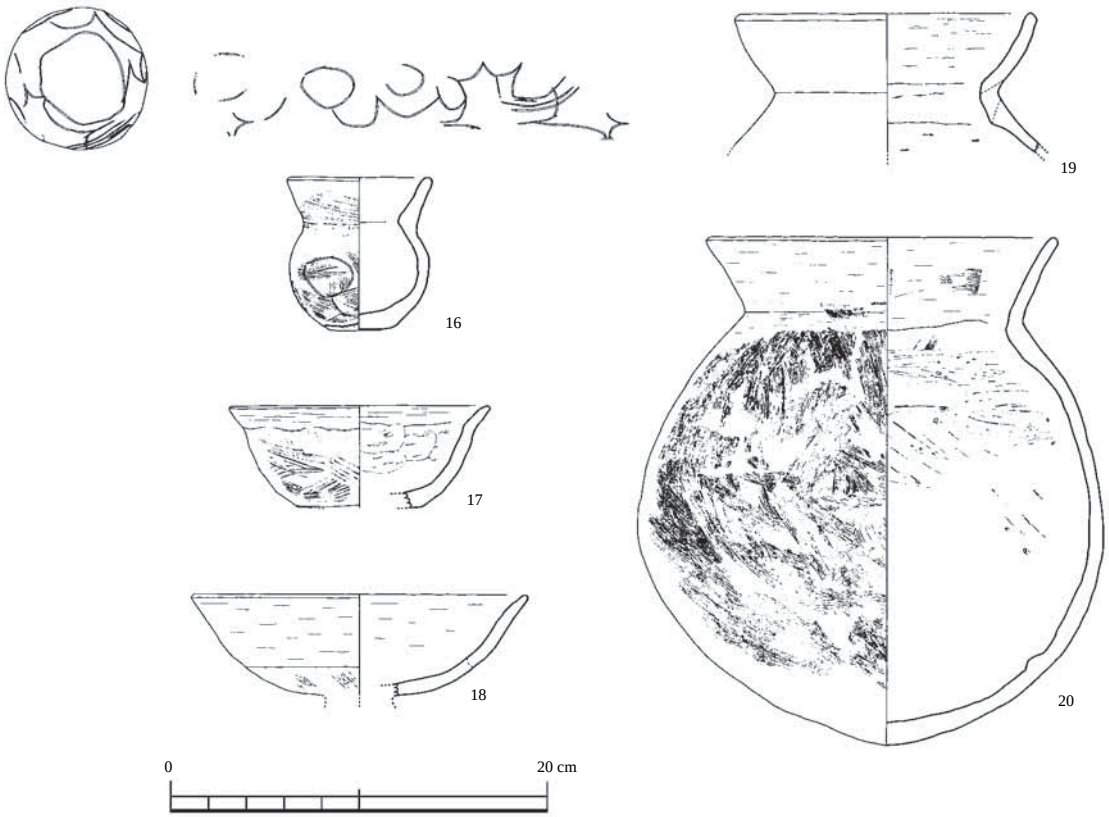
遺構・埋土（第**18**図，図版**9**）

55区の西側に位置している。平面プランは南北方向にやや長い方形を呈している。規模は軸（Ａ－Ａ′）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第16図　古墳時代４号住居址実測図



第17図　古墳時代４号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

上で4.6m、軸（Ｂ－Ｂ′）上で5.2mを測る。検出面から床面までの深さは最大で30cmである。住居址内には壁際に小ピットが点在している。これらは東側を除いて住居址内を一周している。１号・３号住居址で確認されたものと同様の機能を有していたと考えられる。柱穴は計４個確認されたが、住居址の平面プランからややずれている。床面には貼り床等の整地は施されていなかった。住居址床面の東北部隅に焼土の落ち込みが１個所確認されたが、位置的に見てこれを炉跡と認定してよいか疑問である。この他に炉跡とおぼしきものは見られなかった。

住居址の埋土には、主に粘質をあまり持たない淡褐色土（埋土１層）と粘質を持ち、炭化物、焼土を多く含む暗黄褐色土（埋土２層）があるが、柱穴には埋土２層よりやや粘質を持たない黄褐色土（埋土３層）が堆積しており、埋土２層と分層できる。出土遺物の多くは埋土２層直上に分布しており、このことから埋土３層が貼り床であった可能性もある。

出土遺物（第19図，図版18）

埋土１層から２層にかけて多くの土師器が出土している。保存状況は本遺跡群内ではかなり良好な方で、壁に近い地点で出土した４点の土師器は、原位置を留めた状態で出土し、完形かそれに近い形を保っていた。ここではそれらを含めて計６点を図示した。

〔坏〕（21）

21は、完形の坏で住居址西側の壁際から口縁を上にした状態で出土している。器形は半球形というより偏平を呈しているが、底部はやや丸く仕上げてある。体部外面はハケ調整で、底部はヘラ削りの後ナデを施す。口縁は強く横ナデされており、やや外反している。

〔壷〕（22~24）

22は、破片から復元したが、小型丸底壷であろう。胴部内外面はヘラ削りの後ナデ、胴部外面上位はハケの後ナデ、口縁は横ナデを施す。23は、短頸の広口壷で完形品である。口縁を下にした状態で出土している。胴部内面はヘラ削りの後ナデ、胴部上位はヘラ削りのみで口縁は横ナデを施す。胴部外面はヘラ削りの後ナデ、胴部上位から上は横ナデを施すが、胴部外面のハケ調整はほとんどナデ消されている。内面には調整時のヘラの擦痕が残る。24は、埋土一括資料を復元したもので壷か甕であるが、ここでは一応短頸の直口壷としておく。胴部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデ、胴部外面はハケ調整、口縁部はハケ調整の後横ナデを施す。住居址外の遺物と接合しており、あるいは流れ込みの遺物かもしれない。

〔甕〕（25・26）

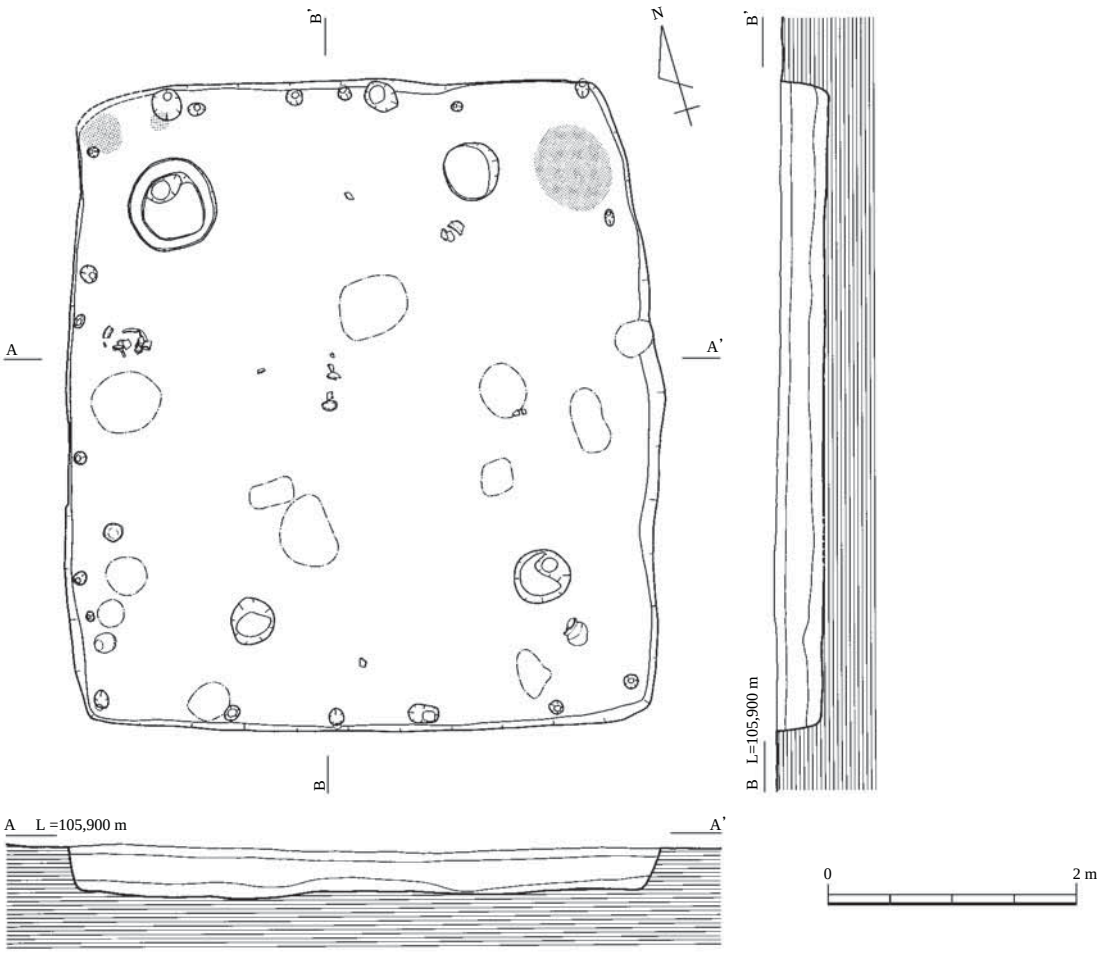
25は、口縁部の一部を欠損しているが、完形に近い甕である。倒れた状態で出土している。胴部内面はヘラ削り、胴部外面はハケ調整の後ナデ、口縁部内外は横ナデを施す。口縁は外湾気味に立ち上がる。胴部外面のハケ調整はほとんどナデ消されている。くびれ部には接合痕が残っている。26は、全体の約１／３を欠損した甕である。胴部内面はくびれ部までヘラ削りを行い、胴部外面はハケ調整の後ナデ、口縁部内外面は横ナデを施している。口縁は、器壁に比べやや厚く、くの字状にやや直線気味に立ち上がる。口縁端部下を強く横ナデしているため、段がついているように見えるが、基本的には段を有していない。

６　６号住居址

遺構・埋土（第21図，図版10）

55区の東側に位置し、５号住居址のほぼ真東にある。遺構検出時から東側は削平されており、さらに撹乱

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第18図　古墳時代５号住居址実測図

第19図　古墳時代５号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

坑が多く不明な点が多いが、現状から推測すると平面プランは、南北方向に長い長方形を呈していたと考えられる。規模は長辺で6.9m、短辺で西側掘り込みから東側柱穴まで4.8mを測る。検出面から床面までの深さは最大で40cmであるが、床面も撹乱坑による凹凸が目立つ。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。柱穴とおぼしきものが計４個確認された。床面には貼り床等の整地は施されていなかった。炉跡については、東側に数箇所焼土の落ち込みが確認されているが、炉跡と認定するには至らなかった。

住居址の埋土は主に粘質をやや持つがしまりのない炭化物、焼土の粒を含んだ暗黄褐色土（埋土１層）で構成されている。この他炭化物、焼土が部分的に堆積している。埋土１層中には比較的原形を留めた炭化物が見られ、床面付近には焼土のまとまりが数ヶ所確認されている。撹乱坑が多く断定はできないものの、本住居址は埋土１層堆積前後に焼失した可能性が高い。

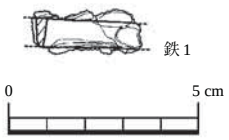
出土遺物（第20・22図，図版19）

埋土１層から若干の土師器片が出土しているが、小片のため図示するには至らなかった。ただ炭化物中より鉄製品が１点出土している。

なお住居址の壁際付近から土師器が２点出土している。遺構外であるため、本住居址に伴うものかどうかは疑問であるが、参考のためここで取り上げておく。

〔鉄製品〕（鉄１）

鉄１は、住居址床面に残っていた炭化物中より出土したものである。最大長３ｃｍ、最大幅0.7ｃｍ、最大厚0.25ｃｍを測る。形状から判断すると刀子の一部とも考えられるが、錆が多く付着し、加えて小破片であるため、器種を特定するには至らなかった。



第20図　古墳時代６号住居址出土遺物実測図

〔甕〕（27・28）

27は、口縁部の一部を欠損している甕である。胴部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデを施し、胴部外面はハケ調整、口縁部はハケ調整の後横ナデを施す。口縁は外湾気味に立ち上がり、口縁端部は外傾している。**28**は、全体の約１／３を欠損している甕である。胴部内面はヘラ削り、胴部外面はハケ調整、口縁内外面はハケ調整の後横ナデを施している。胴部外面には煤の付着が認められる。口縁はくの字状に立ち上がる。両者共、器面がやや風化しており、全体的にやや歪んでいる。

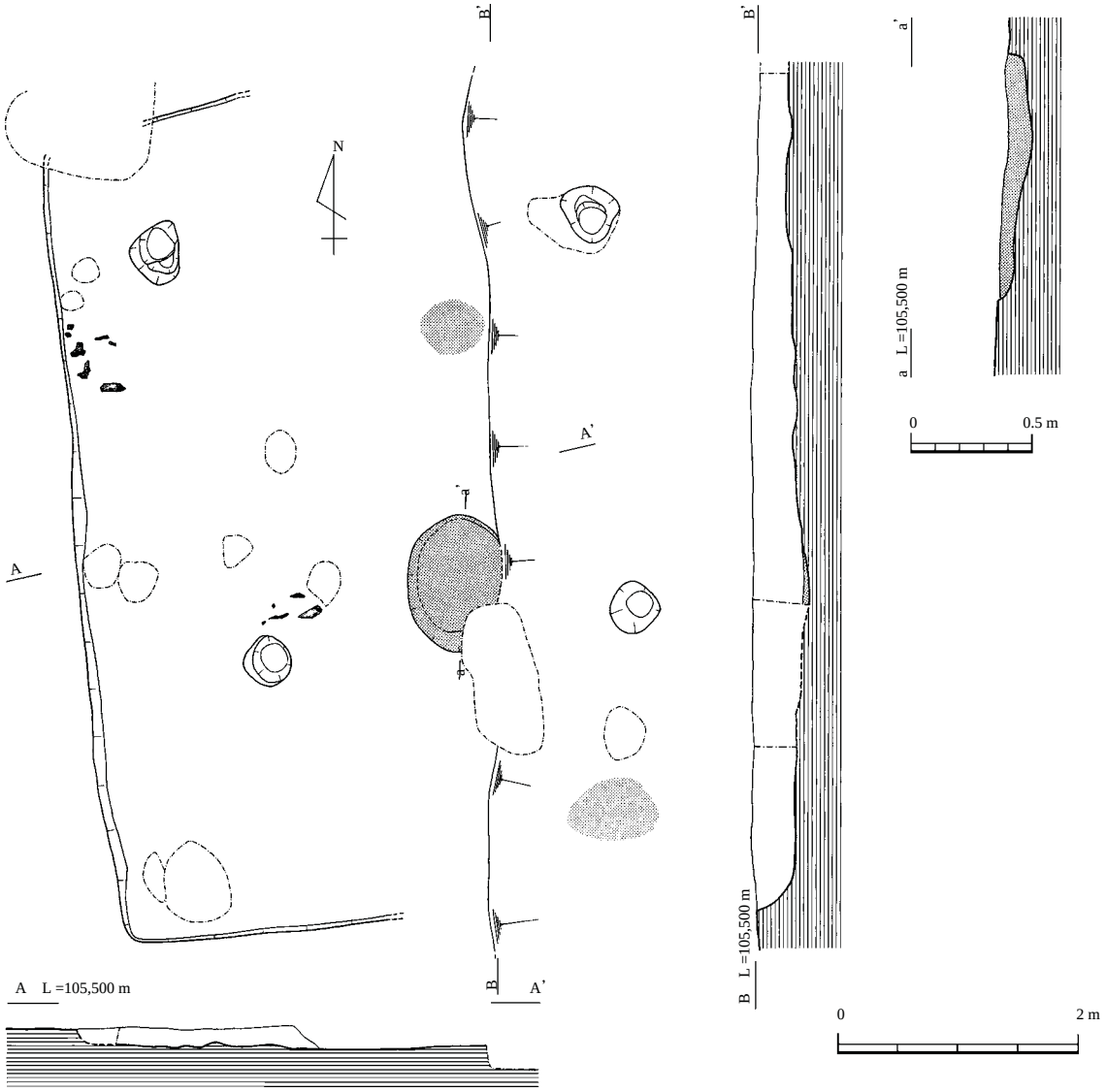
７　７号住居址

遺構・埋土（第24図，図版11）

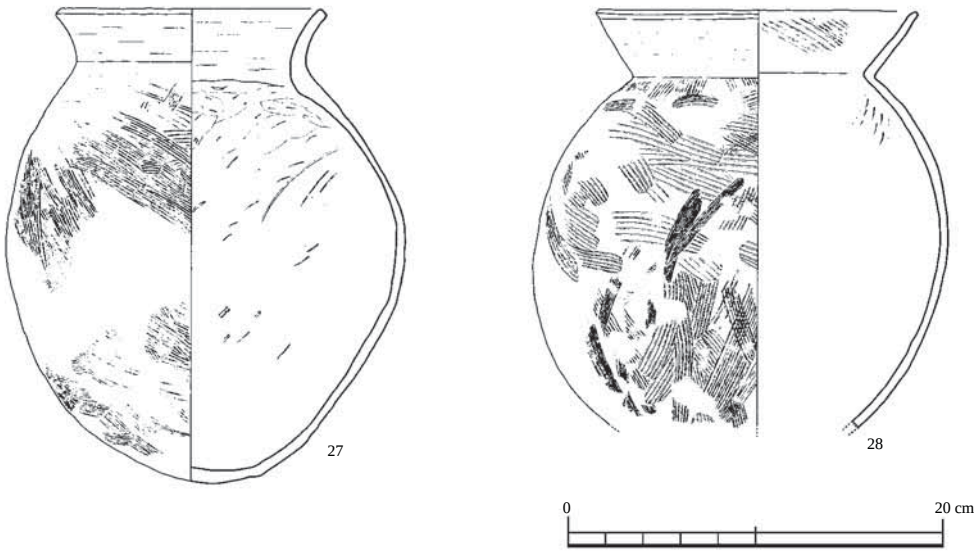
５号住居址の東側、６号住居址の南側に位置する。上部を削平されているが、平面プランは南北方向にやや長い方形を呈している。規模は軸（Ａ－Ａ′）上で4.0m、軸（Ｂ－Ｂ′）上で4.6mを測る。検出面から床面までの深さは最大30cmである。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。柱穴は計４個確認された。床面には貼り床等の整地は施されていなかった。床面の所々には、炭化物や焼土が点在している。炉跡は、住居址中央からやや西側に寄った所に１基検出された。

住居址の埋土は、粘質を持たず若干の炭化物を含む暗褐色土（埋土１層）と粘質を持たず炭化物、焼土を多く含む黒褐色土（埋土２層）、それに粘質を持たない暗褐色土（埋土３・４層）に分けられる。埋土３層

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第21図　古墳時代６号住居址実測図



第22図　古墳時代６号住居址周辺出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

と４層の違いは、黒褐色土をブロック状に含むかどうかであって、含まないのが埋土３層、含むのが埋土４層である。ただ基本的には同じ埋土と考えてよい。出土遺物は主に埋土１層と２層から多く出土している。

出土遺物（第23・25図，図版20）

西側の壁沿いに原位置を保った状態で土師器甕が１点出土している他、埋土一括品も含めると計６点の土師器を復元・図示できた。また埋土１層より鉄器が２点出土している。

〔高坏〕（29・30）

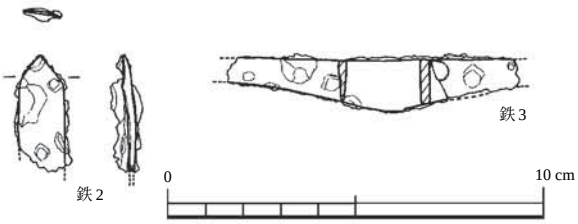
29は、坏部のみ残る高坏で、後述する30と同一個体の可能性がある。体部外面はハケ調整の後ナデ、口縁部は横ナデを施し、部分的にヘラ磨きとおぼしき磨き痕が見られる。体部と口縁部の境には稜が見られ、緩やかな段を作り出している。口縁は内湾しており、口縁端部でわずかに外反している。30は、逆に脚の裾部のみである。裾端部は、内外面共にハケ調整を施し、外面にはその後横ナデを施す。柱状部を欠くため、脚部全体の形状ははっきりしないが、ラッパ状に開いていたと考えられる。

〔甕〕（31～34）

31は、住居址の西側の壁際に逆さにした状態で出土した。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整、口縁内外面は横ナデを施す。口縁はわずかに外湾している。胴張りで最大径が胴部中位よりやや上にくる。底部外面は赤変しており、煮炊きの際にかなり熱を受けていたと考えられる。32～34は、いずれも破片からの復元で甕と判る。32は、口縁がやや外湾しながら立ち上がっている。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整の後ナデ、口縁内外面は横ナデを施すが、くびれ部には調整が及んでいない。そのため接合痕が消されずに残っている。33は、わずかに外湾しながらも直線気味に立ち上がる口縁を持っている。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整の後ナデ、口縁内外面はハケ調整の後横ナデを施す。34は、口縁が内湾しながら立ち上がり、端部でやや外反させている。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整の後ナデ、口縁内外面は横ナデを施す。断面には接合痕が幾つか確認できる。なお31～34にはすべて煤が付着しており、いずれも煮炊きに用いたと考えられる。

〔鉄製品〕（鉄2・3）

鉄2は、ヤリカンナの刃部とおぼしき鉄器片である。残存長3.1cm、最大幅1.2cm、最大厚0.2cmを測る。刃部が少し変形している。鉄3は、両端が欠損しているが、全体の形状や断面形から刀子と考えられる。残存長7.75cm、最大幅1.4cm、最大厚0.25cmを測る。中央部付近にわずかに段がついており、そこに刃部と茎部の境があると考えられる。比較的保存状態はよく、錆もさほど進んでいない。



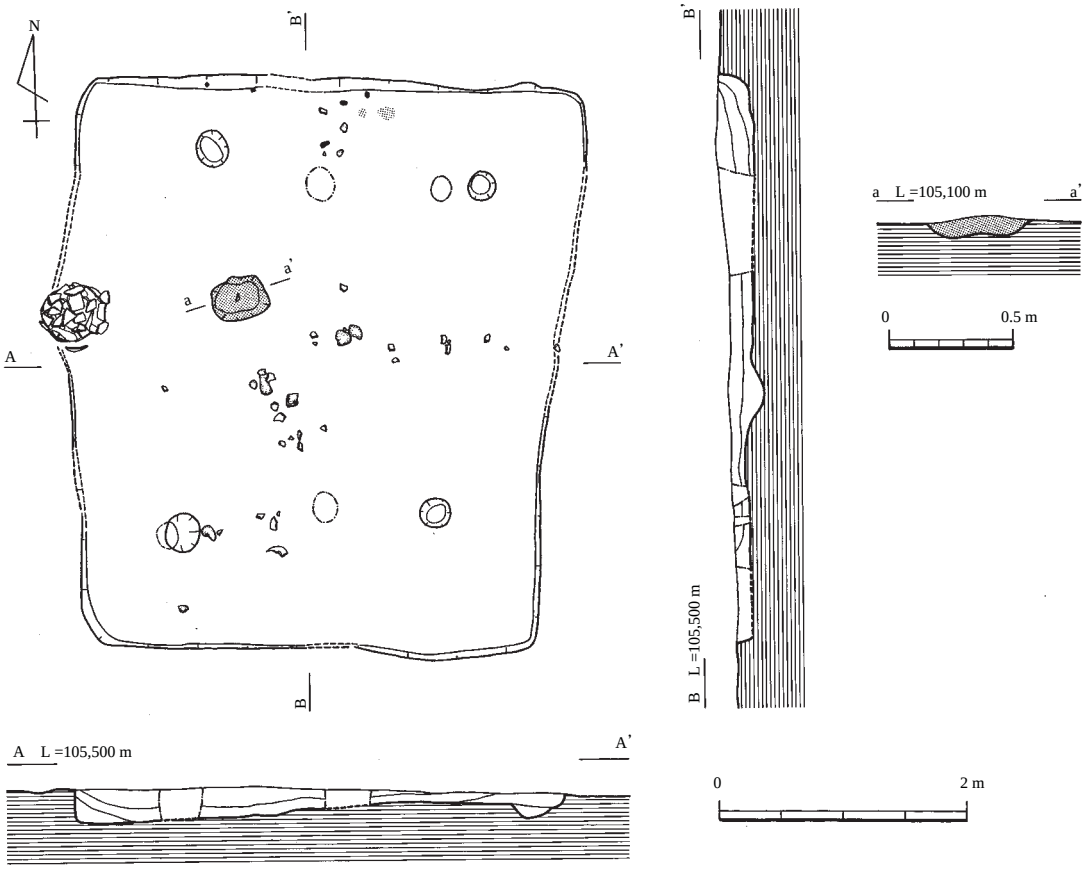
第23図　古墳時代７号住居址出土遺物実測図（１）

８　８号住居址

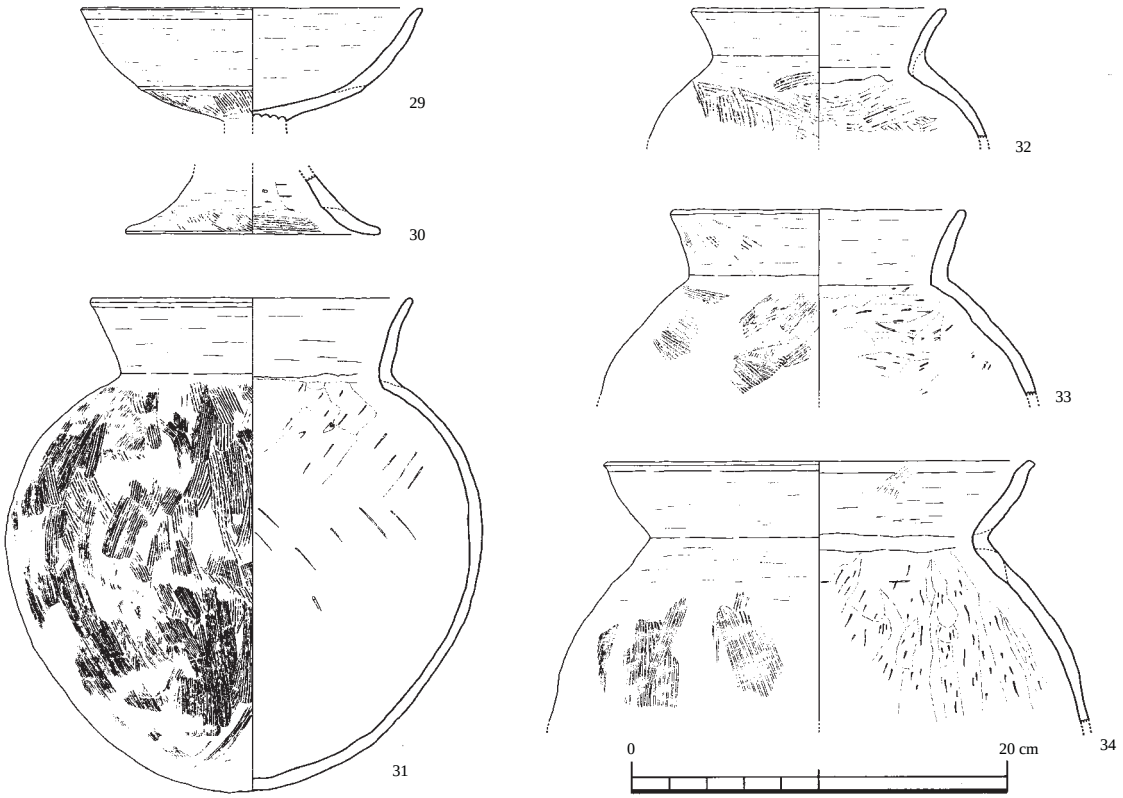
遺構・埋土（第26図，図版12）

52区と55区の境に位置する。52区の方が55区に比べて、地表面から１m近く掘り下げられていたため、52区にかかっていた約１／３は削平を受けている。柱穴の配置から推測すると住居址の平面プランは南北方向に長い長方形を呈していたと考えられる。規模は軸（Ａ－Ａ′）上で6.4m、短辺は4.6m以上を

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第24図　古墳時代７号住居址実測図



第25図　古墳時代７号住居址出土遺物実測図（２）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

測る。検出面から床面までの深さは最大30cmである。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。柱穴は計４個確認された。床面には貼り床等の整地は施されていなかった。２号住居址同様、床面や壁面は熱を受けたためか、赤く変色している。住居址の中央付近に炉跡が１基検出された。

住居址の埋土は、粘質を持たず炭化物、焼土を含む茶褐色土（埋土１層）と粘質を持たず炭化物、焼土を多量に含む赤茶褐色土（埋土２層）に分けられる。埋土２層中には原形を留めた炭化物を多く含んでいる。また壁際には焼土が多く堆積しており、本住居址は埋土２層堆積前後に焼失したものと推測される。

出土遺物（第27図，図版21）

埋土２層から土器片が若干出土している。いずれも小片であり、ほとんど図示できなかったが、辛うじて２点図示できた。

〔高坏〕（35）

35は、脚の裾部のみである。裾端部は、内外面共に横ナデを施す。柱状部を欠くため、脚部全体の形状ははっきりしないが、ラッパ状に開いていたと考えられる。裾端部には沈線を二条巡らせている。

〔甕〕（36）

36は、小片であるため器種の特定が難しいが、口縁の形状から甕と考えられる。胴部内面はヘラ削り、口縁部は横ナデであるが、外面は風化しており調整は不明。口縁は内湾しながら立ち上がる。

９　９号住居址

遺構・埋土（第28図，図版13）

７号住居址と８号住居址に近接した所に位置している。上部を削平され、南北をトレンチ坑によってカットされているが、平面プランは不整形の方形を呈していた事が判る。規模は軸（Ａ－Ａ′）上で4.8m、軸（Ｂ－Ｂ′）上で5.1mを測る。検出面から床面までの深さは最大30cmである。住居址内には周溝や壁材を支える杭痕は確認できなかった。柱穴は計４個確認された。また床面には貼り床等の整地は施されていなかった。炉跡は、住居址中央からやや西側に寄った所に１基検出された。

住居址の埋土は、主に粘質をあまり持たず炭化物、焼土を少し含む暗褐色土（埋土１層）と粘質をあまり持たず黄褐色土（埋土２層）で構成されている。部分的に、粘質を持たず焼土を含んだ暗茶褐色土（埋土３層）が見られるものの、層を成して堆積しているのは埋土１・２層のみである。

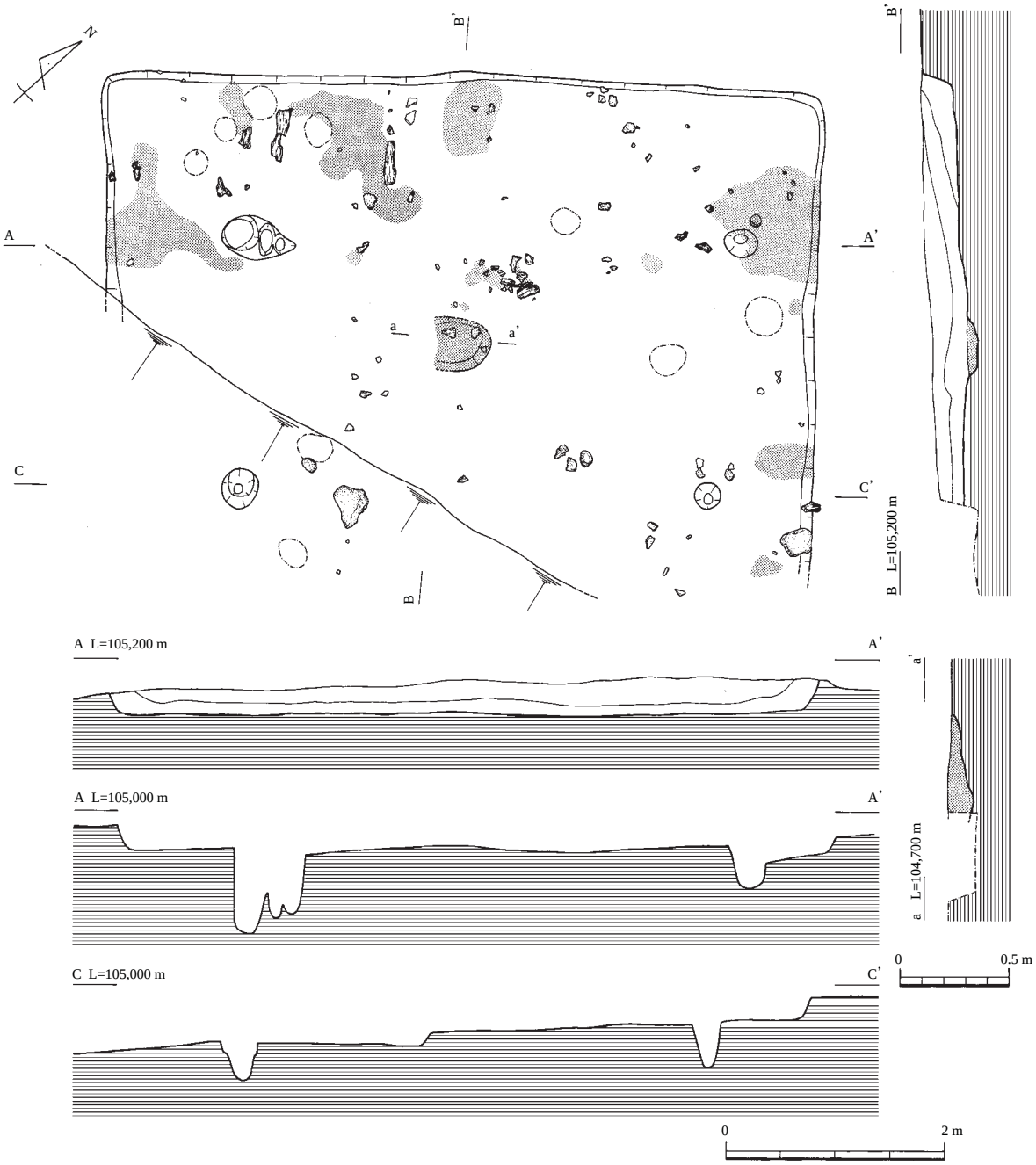
出土遺物（第29図，図版22）

削平を受けているためか、住居址内から出土したもので図化に耐え得るものは、土師器２点のみである。

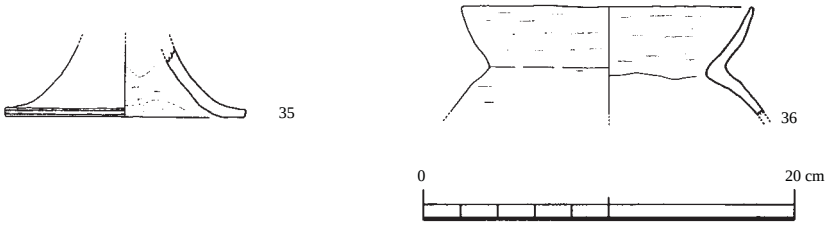
〔壷〕（37・38）

37は、ほぼ完形の小型丸底壷である。口縁を上にした状態で出土している。口縁に比べやや胴部が張り出しており、胴部はやや偏平な球形を呈している。口縁は内湾しながら立ち上がり、内面にわずかな段がついている。内面胴部はヘラ削りの後ナデ、口縁は横ナデを施す。外面は胴部中位まではヘラ削りの後ナデ、胴部中位は横方向のハケ調整、それより上は斜め方向のハケ調整の後ナデ（横ナデ）を施す。残りは良くないが、外面と口縁内面には彩色した痕跡が認められる。38は、口縁部のみであるが壷と考えられる。その大きさから小型丸底壷の可能性もある。内面は横ナデ、外面はハケ調整の後横ナデを施す。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第26図　古墳時代８号住居址実測図



第27図　古墳時代８号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

10　包含層遺物（第30・31図，図版23）

古墳時代のものと考えられる出土遺物で、出土地点が明らかでなかったり、遺構に伴わないものの図化することが可能な出土遺物を以下に取り上げておく。

〔土師器〕（39～42）

土師器は４点図示できた。内訳は甕、壷、坏で器種がはっきりしないものも含めている。

39は、ほぼ完形の坏で、体部内面は不定方向のナデ、外面はヘラ削りの後ナデ、口縁内外面は横ナデを施す。器形はやや偏平で、口縁はわずかに外反している。40は、全体の半分近く欠損している坏で、体部内面はヘラ削りの後不定方向のナデ、外面はヘラ削りの後ナデ、口縁内外面は横ナデを施す。39に比べ半球形に近く、口縁端部が短く外反している。41は、破片から胴部のみ復元したが壷と考えられる。内面はヘラ削り、外面は胴部中位まではハケ調整の後ナデ、胴部中位はハケ調整で整形後ナデ、胴部上位はハケ調整の後横ナデを施す。42は、口縁部片のみ残っていたが、復元すると甕になるか。口縁内外面はヘラ磨きを施す。口縁は短く外湾し、口縁下に突帯を１条巡らす。弥生土器の可能性もあるが、ここでは土師器として取り上げておく。

〔須恵器〕（43）

小破片は遺跡群内に散在していたが、実測可能なものは１点のみであった。

43は、破片からの復元であるが、坏蓋か坏身と考えられるがここでは坏蓋としておきたい。天井部内面は不定方向のナデ、外面は回転ヘラ削り、口縁は横ナデを施す。外面のヘラ削りは器高の約１／２まで行っている。ヘラ削りによる稜はほとんど見られない。

〔装身具〕（装１）

玉類は出土していないが、45区のピット内より耳環が１点出土している。

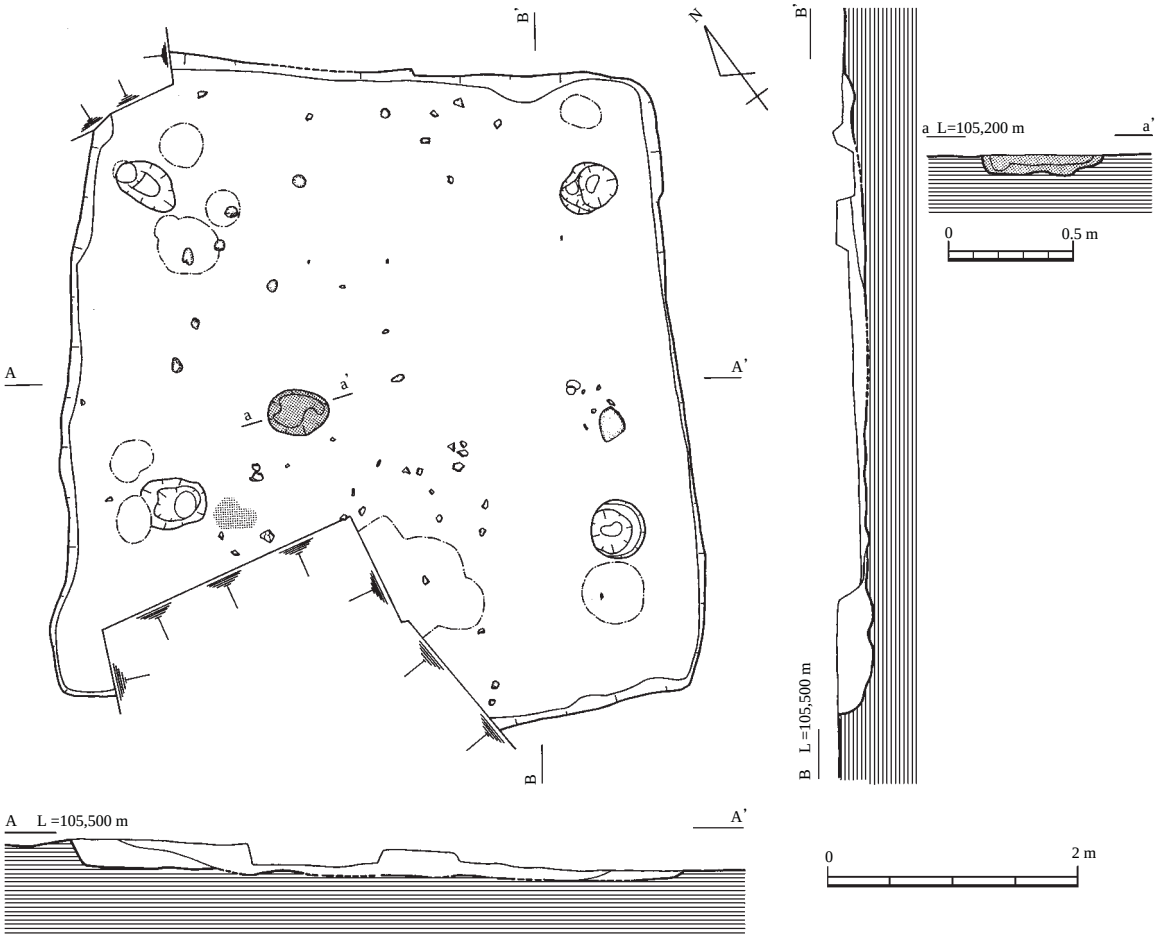
装1は、金環でほぼ完形を保つ。長径3.25cm、短径2.9cm、管身径0.8cmを測る。重量は25.4ｇで所々に錆が付着している。

〔鉄製品〕（鉄4～7）

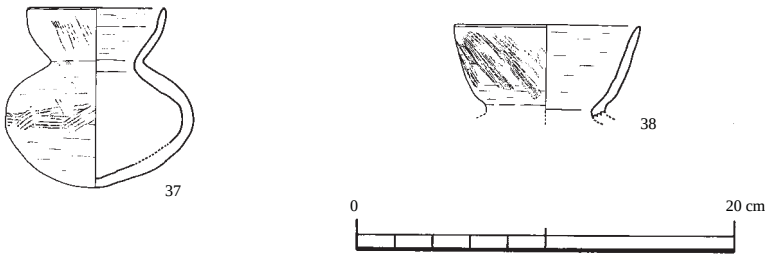
鉄製品としては、６号住居址、７号住居址より出土したものの他に鉄鏃が４点出土している。

鉄4は、頸部以下を欠損しているが、鏃身部が三角形を呈しており、三角形鏃の範疇に入る。残存長4.25cm、鏃身長2.8cm、鏃身幅2.4cmを測る。錆が多く細部の復元は困難である。形状からして弥生時代に属する可能性もあるが、ここでは古墳時代の遺物として取り上げておく。鉄5は、茎部が欠損しているものの、ほぼ完形を保った腸抉三角形鏃である。残存長15.7cm、鏃身長５cm、鏃身幅3.7cm、頸部長5.6cmを測る。錆はあまり付着しておらず、全体的に残りは良い。鏃身部は、先端がやや丸みを帯びた二等辺三角形状（柳葉状）を呈している。鉄6は、頸部以下を欠損した三角形鏃と考えられる。残存長7.8ｃｍ、鏃身長3.8ｃｍ、鏃身幅3.7cm、頸部残存長4.2cmを測る。錆がかなり進行しており、保存状態は芳しくない。また腐食のせいか鏃身関部で屈折している。鏃身部の形状は三角形というより五角形に近く、逆刺は見られない。鉄7は、鉄5同様茎部を部分的に欠損した長頸鏃である。残存長10.1ｃｍ、鏃身長1.8ｃｍ、鏃身幅1.2ｃｍ、頸部長6.3cmを測る。残りは比較的良好で錆もさほど見られない。鏃身部の形状は二等辺三角形に近く、先端は丸みを帯びており、鏃身関部を持っている。

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

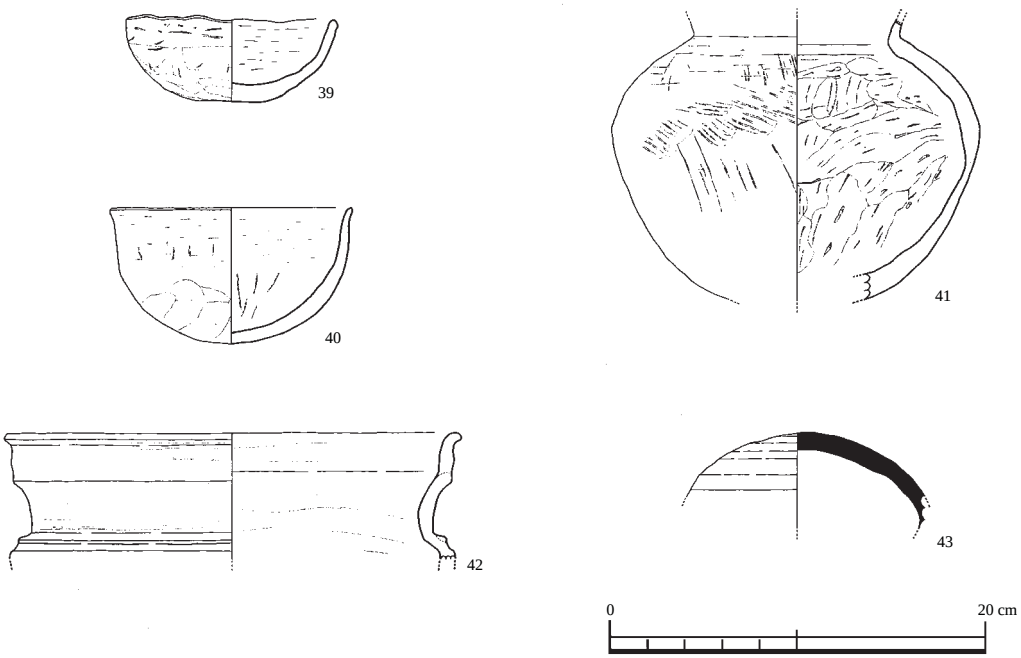


第28図　古墳時代９号住居址実測図

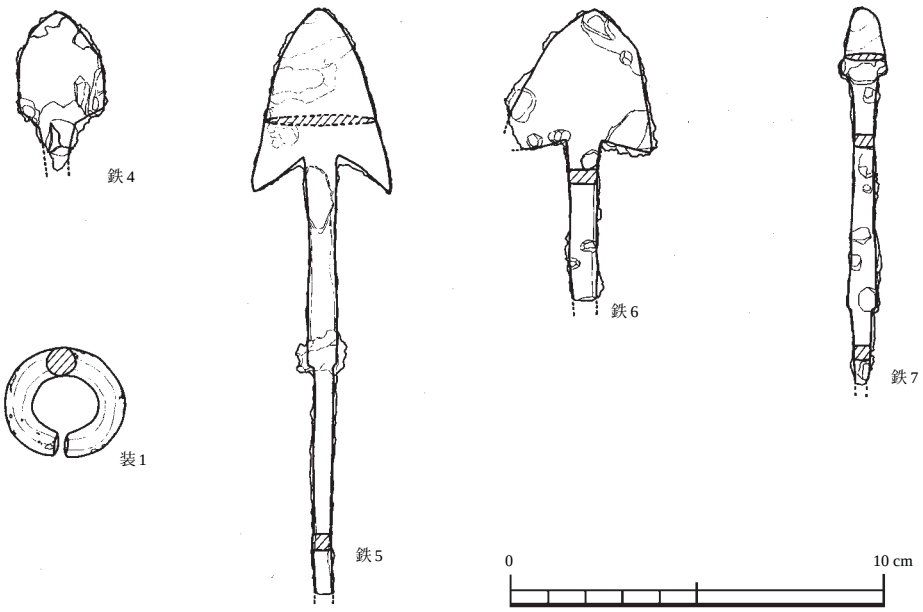


第29図　古墳時代９号住居址出土遺物実測図

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



第30図　古墳時代包含層遺物実測図（１）



第31図　古墳時代包含層遺物実測図（２）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第４章　総括

第１節　弥生時代

今回の調査では、遺構に伴い、なおかつ時期比定ができる遺物は出土していない。また52区周辺から出土した土器群も量的には比較的多いが、いずれも破片のみで完形に復元できるものはなかった。このように石の本遺跡群における弥生時代の様相は、散発的に出土している包含層遺物から窺い知るしかない。資料の制約はあるものの、本遺跡群における弥生時代について総括していく。

〔住居址〕

平面プランが長方形を呈する竪穴住居址が１軒検出された。しかし削平等によりそこから得られる情報はかなり制限されている。つまり前述したように住居址内から時期比定ができる遺物は出土していないため、年代がはっきりしないということである。次に本遺跡内には同時代の遺構が検出されていないため、本遺跡内における住居址の位置づけや評価が与えにくいとも言える。ただ年代については、住居址の周辺から出土した土器の年代を敢えて当てはめるなら、断片的な資料しかないため確実性に欠けるものの、とりあえず弥生時代後期に比定できるだろうか。また地形的に見ると本遺跡の東南にある御船塚（標高110m）から伸びる微高地上に立地している。周囲の調査区から当該時期の遺構・遺物は全く検出されていない。このような状況から１区で検出された住居址は、御船塚周辺に立地していた集団の末端部にあたるのではないか。また本遺跡群の南側には遺物包蔵地が広がっており、周辺に当該時期の遺跡が存在する可能性も捨て切れない。

〔出土遺物〕

52区周辺から出土した土器片は口縁、胴部等様々であるが、長頸壷や袋状口縁壷片、それにジョッキ形土器片等を見ると所謂免田式の特徴が認められる。その他二重突帯や刻み目突帯のある壷や甕の胴部片が出土しているが、その多くが小破片であるため、時期比定はもちろんその器種認定さえ困難なものが多い。しいて時期を言及するなら弥生時代中期から後期というところではないか。本遺跡の北側には弥生時代の集落跡として石原亀甲遺跡（山尻遺跡群）が位置している。一部しか調査されていないが多くの竪穴住居址がみつかっており、大集落を形成していたと考えられる。時期的には併行しており、また立地的にも近接している。資料上の制約から両者を一概に比較することはできないが、その関係については考慮する必要がある。

以上、本遺跡における弥生時代の様相について住居址・遺物から総括してみた。これらが遺跡群の周辺部で見つかっていることは、周辺に弥生時代の遺跡が広がっている可能性を示唆している。今後周辺の調査が進めば、今回の調査で明らかにならなかった、当該地域における弥生時代の集落のあり方等が少しずつでも判明してくるであろう。

第２節　古墳時代

古墳時代の遺構は小山山東麓に集中して検出された。調査開始時には既に削平を受けていたことを考慮す

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

ると、当時ある一定の期間内に、少なくとも９軒以上の竪穴住居が建てられ、集落を形成していたことは容易に推測される。また遺物の出土量が少ない中で、焼失した住居址や線刻のある土器等、興味深い事例も確認されている。これらを含め古墳時代の総括を行いたい。

〔住居址〕

今回の調査では９軒の竪穴住居址が比較的集中した状態で検出された。小山山東麓で平地が広がっているのは当遺跡群のみであり、このわずかな平地に小集落が存在していることは、熊本平野における当該時期の集落の動向を考える上で重要なことと言える。周辺に同時期の集落は現時点では確認されておらず、石原町の石原亀甲遺跡で竈付きの住居址が検出されている程度である。本遺跡群から竈付きの住居址は検出されていないため、時期的には石原亀甲遺跡より古いと見てよいだろう。

住居址は実に様々な状態で検出されている。遺構の保存状態の良し悪しや遺物の寡多等、それらは各住居址によって異なるわけだが、特に特徴的なのは焼失した住居址（以下「焼失住居」とする）である。２・６・８号住居址の計３軒が現在のところ焼失住居として認識している住居址である。他にもその可能性のある住居址があるが、明らかに焼失したと確認されるのは上記の３軒のみである。

焼失には２つの要因が考えられる。１つは不慮の火災によるもので、もう１つは意図的に焼却させたものである。床面に残った炭化物や遺物の状態からこれらを類推すると２号住居址には比較的多くの土器片が出土しているのに対し、６・８号住居址は削平されていることを差し引いても遺物の量が少ない。また炭化物については、２号住居址で西側壁付近に放射線状に広がる炭化物が確認されている他は、保存状態が悪く、その形状を復元するには至らなかった。このような状況から、少なくとも２号住居址は焼却した後に放置された、つまり意図的に焼却されたものと推測される。なお家財道具の持ち出し等が行われた形跡は確認されなかった。

意図的な焼却については、その目的ははっきりしないものの、住居址廃絶に伴うある種の儀礼行為の可能性は指摘できる。全国的に見てもこのような焼却住居の例は多く見受けられ、県内においてもその事例は確認されている。確たる証拠はないがおそらく６・８号住居址もその例に漏れないものと考えられる。

〔出土遺物〕

古墳時代の土師器は多く出土しているが、そのほとんどが包含層遺物で全体の形状を復元できるものは、住居址内出土のものを含めても全体の半分にも満たない。加えて住居址内出土といっても埋土中のものも含めているため、本来住居址に伴っていたかどうか疑わしいものもある。土器そのものの年代は、従来の編年観を当てはめるならおよそ４世紀後半から５世紀前半代とみてよいが、このような状況で分類や編年等を試みても、本遺跡群における土器編年の実態を正確に把握しているとは言い難い。したがって包括的な検討は避け、個々の特徴的な遺物、特に線刻のある壷について取り上げてみる。

３号住居址と４号住居址において出土した線刻のある壷について、これらの線刻が単なる偶然の産物ではないことは明らかである。ただ同じ線刻のある壷でも両者の間には若干の差異が認められる。３号住居址出土の壷（以下、線刻壷Ａと呼称）はくびれ部に短い縦線を巡らせた後、それらを二分するように一周させている。それに対して４号住居址出土の壷（以下、線刻壷Ｂと呼称）は円と弧を基調とし、胴部を一周するように巡らさせ、底部付近にはそれらとは別に沈線を一条巡らされている。直線を主体にしている線刻壷Ａに対し、線刻壷Ｂは円弧を主体としている。器形としては両者共どちらかというと手捏ね土器と呼んだ方が正確かもしれないが、相対的に見ると線刻壷Ａより線刻壷Ｂの方がやや形は整った感がある。

次にこれらの線刻を絵画の類とみなすか、文様の類とみなすかという点について考えてみたい。線刻壷Ａについては文様として間違いはないが、線刻壷Ｂは当初連続した円弧から絵画ではないかと考えていた。しかし絵画にしては規則性・連続性があり、最終的には文様であろうと判断した。何らかの装飾であろうが、

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

その意味については確固たる根拠がないため、現時点では言及を避けたい。

このように若干の差異がある線刻壷Ａ・Ｂであるが、出土状況は共通するものがある。どちらも住居址の南側の壁際、つまり入り口付近から出土しているということである。さらに線刻壷Ａの方は、ほぼ同地点から複合口縁壷が出土しており、線刻壷Ａとほぼ同時期のものと考えられる。線刻壷Ｂも同地点ではないものの、近接した場所から甕が１点出土している。また９号住居址から出土した小型丸底壷（彩色）も周囲に土器はないが、類似した状況で出土している。東側の壁際から出土しているのは、入り口が東側にあったためと考えられる。

このような状況から推測すると線刻壷Ａ・Ｂは、住居の廃棄時に行われた儀礼行為に用いられたものと考えられる。また前述した９号住居址出土の小型丸底壷も線刻こそないが、同様の用途があったと推測される。両者（線刻壷Ａ・Ｂと小型丸底壷）に同様の用途があったとするなら、それぞれの住居址間に時間的・階層的格差を見出すことは可能ではないだろうか。

以上、本遺跡における古墳時代の様相について住居址・遺物から総括してみた。９軒の住居址は幾つかの集団に分かれていた可能性もあるが、それについては考察不足のため言及を避けたい。分類や編年に言及していないため、物足りない感があるものの、現状ではこのような総括にならざるを得ない。ただ、今後、熊本平野における古墳時代の研究が進めば、それらを含めた当該地域の集落のあり方ももう少しはっきりしてくるだろう。

参考文献

松本雅明　「石原亀甲遺跡」『熊本の上代遺跡－熊本の風土とこころ第二集－』熊本日日新聞社　1980年

野田拓治　「古式土師器の成立と展開―特に中部九州における編年試案―」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻　森貞次郎博士古稀記念古文化論集刊行会 1982年

石守 晃　「住居の廃絶の一形態『焼却処分』について」『すまいの考古学―住居の廃絶をめぐって』資料集　山梨県考古学協会　1996年

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第２表　弥生時代出土遺物観察表（土器）

No	収蔵No	調査区名	遺構名	器種名	器高	口径	胴部径	胎土	焼成	色調	技法的特徴（内面）	技法的特徴（外面）	備考
1	1	１区	包含層遺物	甕	14.1	26.0	28.4	１～２mm程の砂粒をやや多く含む	良好	暗黄褐色	胴部はハ、口縁部はハの後横	胴部はハ、クビレ部にハの後横、口縁部は横	
2	2	52区	包含層遺物	甕か	8.6	不明	不明	１～2.5mm程の砂粒を少し含む	良好	淡黄褐色	胴部はハの後ナ	胴部はハ、突帯付近はその後横	突帯（一条）
3	3	56区	包含層遺物	壷	2.8	19.2	不明	１～３mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	口縁部は横	頸部はハの後横、口唇部は横	刻み目、内面が風化
4	4	52区	包含層遺物	壷（長頸）	10.1	7.4	不明	0.5～1.5mm程の砂粒をやや含む	良好	淡黄褐色	頸部はナ、口縁部は横	頸部はハの後ナ、口縁部はハの後横	接合痕有
5	5	52区	包含層遺物	壷（袋状口縁）	6.35	12.2	不明	0.1～１mm程の砂粒をやや含む	良好	淡黄褐色	頸部はナ、口縁部は横	頸部はハ、口縁部は横	彩色、沈線（一条）
6	6	52区	包含層遺物	壷か	5.9	不明	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡褐色	口縁部は横	口縁部は横	突帯（一条）
7	7	52区	包含層遺物	壷か	8.3	不明	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	胴部中位はハの後ナ、上位はハの後ナ	胴部はハ	突帯（一条）、線刻
8	8	1区	包含層遺物	壷	14.3	不明	22.1	１～２mm程の砂粒をやや含む	良好	灰褐色	胴部中位まではハ、胴部中位から頸部までハの後ナ、頸部は横	胴部はハ、頸部は横	突帯
9	9	52区	包含層遺物	壷か	7.7	不明	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	黒褐色	胴部はハ	胴部はハの後ナ、突帯付近は横	刻み目突帯（一条）
10	10	52区	包含層遺物	壷か	6.1	不明	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	胴部はハ、突帯の裏側のみその後横	胴部はハ、突帯付近はその後横	刻み目突帯（一条）
11	11	52区	包含層遺物	壷か	8.2	不明	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	胴部はハ、突帯の裏側のみその後横	胴部はハ	突帯（二条）
12	12	52区	包含層遺物	壷か	7.7	不明	不明	１～２mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	胴部はハ	胴部はハ、突帯付近は横	突帯（二条）
13	13	52区	包含層遺物	壷か	5.4	不明	不明	１～３mm程の砂粒を含む	良好	黄褐色	胴部はハ	胴部はタの後ハ、突帯付近は横	突帯（二条）、下段突帯に刻み目
14	14	52区	包含層遺物	壷か	4.8	不明	不明	１～3.5mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	胴部はハの後ナ	胴部はハの後ナ	浮文（ボタン状）
15	15	52区	包含層遺物	ジョッキ形か	11.1	7.0	9.4	１～４mm程の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	胴部はナ、口縁部と底部は横	胴部はハ、口縁部と底部はハの後横	彩色

第３表　古墳時代出土遺物観察表（土器）

No	収蔵No	調査区名	遺構名	器種名	器高	口径	胴部径	胎土	焼成	色調	技法的特徴（内面）	技法的特徴（外面）	備考
1	17	52区	１号住居址	甕か	7.3	15.4	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	胴部はヘ、口縁部中位はハ、それ以外の口縁部はハの後横	胴部はハの後ナ、口縁部はハの後横	
2	18	52区	１号住居址	甕	26.6	15.0	22.0	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	褐色	胴部はヘ、口縁部は横	胴部中位までハ、胴部上位から口縁部はハの後横	スス付着、接合痕有
3	19	52区	１号住居址	小型丸底	6.5	10.8	不明	0.5～１mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡赤褐色	胴部中位まではヘ、くびれ部は軽いナか未調整、口縁部は横	胴部中位から口縁部まで横	接合痕有
4	20	52区	１号住居址	壷	15.0	12.0	19.6	0.5～2.5mm程の砂粒をやや含む	良好	淡赤褐色	胴部中位までヘ、上位は未調整、口縁部は横	胴部中位までハ、上位はハの後横、口縁部は横	スス付着、接合痕有
5	21	52区	１号住居址	壷	51.4	18.8	38.6	１～10mm程の砂粒をやや多く含む	良好	橙色	胴部はヘ、口縁部はハ	胴部はハ、口縁部はハの後横	
6	22	54区	２号住居址	坏	5.7	12.2		１～３mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	体部はへの後不、口縁部は横	底部はへの後ナ、体部はハ、口縁部は横	沈線有
7	23	54区	２号住居址	高坏	6.1	不明		0.5～２mm程の砂粒を含む	良好	淡赤褐色	底部は不、口縁部は横	坏部はハの後横	
8	24	54区	２号住居址	壷	12.9	13.0	16.4	１mm以下の砂粒をやや含む、	良好	淡赤褐色	胴部はへの後ナ、口縁部は横	胴部中位までハの後ナ、胴部上位から口縁部はハの後横	接合痕有
9	25	54区	２号住居址	壷か	9.0	16.2	不明	１～３mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	胴部はへ、くびれ部はナ、口縁部は横	胴部はハの後ナか、口縁部は横	接合痕有
10	26	54区	２号住居址	甕か	3.3	15.0	不明	１～３mm程の砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	口縁部は横	口縁部は横	接合痕有、口縁部に歪み
11	27	54区	２号住居址	甕か	10.3	17.3	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハの後ナ、口縁部はハの後横	沈線（暗文）有
12	28	54区	３号住居址	小型丸底か	7.3	6.6	6.0	１～２mm程の砂粒を多く含む	良好	赤褐色	胴部はへの後ナか、口縁部はハの後横か	胴部はハの後ナか、口縁部は横（ハ有か）	線刻、器面が風化
13	29	54区	３号住居址	壷	34.3	16.5	28.2	１～10mm程の砂粒を含む	良好	淡赤褐色	胴部はへ、口縁部はハの後横	胴部はハの後ナ、口縁部はハの後横	胴部外面が一部黒変
14	30	54区	３号住居址	甕	25.6	16.6	23.1	0.5～１mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡黄褐色	胴部はへか、口縁部は横か	胴部はハか、口縁部はハの後横か	器面が風化、接合痕有
15	31	54区	３号住居址	甕か	30.7	不明	30.4	0.5mm～５mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡黄褐色	底部はナか、胴部はヘ	胴部はハ	器面が風化
16	32	54区	４号住居址	小型丸底か	8.1	7.65	7.35	１～３mm程の砂粒を含む	良好	赤褐色	胴部はへの後ナ、口縁部は横	胴部はハ、口縁部はハの後横	線刻
17	33	54区	４号住居址	坏	5.4	14.0		0.5～３mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡褐色	体部はへの後ナ、口縁部は横	体部はハの後ナ、口縁部は横	
18	34	54区	４号住居址	高坏	5.3	18.0		１～２mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡黄褐色	坏部底部は不、口縁部は横	坏部下位は斜ハのナ、上位は横	器面が風化
19	35	54区	４号住居址	甕	7.3	16.2	不明	１～３mm程の砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハの後ナ、口縁部は横	接合痕有
20	36	54区	４号住居址	甕	26.8	18.7	24.8	1.5～５mm程の砂粒を含む	良好	淡赤褐色	胴部はへ、口縁部はハの後横	胴部はハ、口縁部はハの後横	全体的に歪んでいる、スス付着
21	37	55区	５号住居址	坏	4.7	14.3		１～３mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡赤褐色	体部は不、口縁部は横	体部中位まではハの後ナ、口縁部は横	
22	38	55区	５号住居址	小型丸底	5.5	10.2	11.9	１mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	胴部はへの後ナ、口縁部は横	胴部中位まではへの後ナ、上位まではハの後ナ、口縁部は横	
23	39	55区	５号住居址	壷	15.7	12.6	15.5	１～２mm程の砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	胴部はへ、胴部中位まではその後ナ、口縁部は横	胴部はハの後ナか、口縁部は横	スス付着
24	40	55区	５号住居址	壷	12.3	14.4	22.2	１～４mm程の砂粒をやや多く含む	良好	赤褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハ、口縁部はハの後横	内面は風化
25	41	55区	５号住居址	甕	19.1	14.1	18.0	１mm程の砂粒をやや多く含む	良好	暗褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハの後ナ、口縁部は横	スス付着、接合痕有
26	42	55区	５号住居址	甕	25.6	14.4	21.5	0.5～１mm程の砂粒をやや多く含む	良好	赤褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハの後ナ、口縁部は横	スス付着
27	44	55区	６号住居址	甕	25.1	14.4	21.2	0.5～２mm程の砂粒をやや含む	良好	淡黄褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハ、口縁部はハの後横	全体的に歪んでいる、器面が風化
28	45	55区	６号住居址	甕	21.9	17.6	21.9	１～３mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	胴部はへの後ナ、口縁部はハの後横	胴部はハ、口縁部はハの後横	胴部がやや歪んでいる
29	46	55区	７号住居址	高坏	5.9	18.2		１～２mm程の砂粒をやや多く含む	良好	赤褐色	坏部下位は不、上位は横	坏部下位は斜ハの後ナ、上位は横（一部ヘ磨か）	ヘラの擦痕（磨きか）有
30	47	55区	７号住居址	高坏	3.1	13.6		１～２mm程の砂粒をやや多く含む	良好	赤褐色	裾部上半はヘ、下半はハ	裾部はハの後横	29と同一個体の可能性有
31	48	55区	７号住居址	甕	26	17.2	25.4	0.5～３mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハ、口縁部は横	スス付着
32	49	55区	７号住居址	甕	6.8	13.6	不明	0.5～２mm程の砂粒を含む	良好	暗黄褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハの後ナ、口縁部は横	接合痕有、スス付着
33	50	55区	７号住居址	甕	9.8	15.6	不明	１～2.5mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	胴部はへ、口縁部はハの後横	胴部はハの後ナ、口縁部はハの後横	スス付着
34	51	55区	７号住居址	甕	13.7	23.0	不明	１～５mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黒褐色	胴部はへ、口縁部は横	胴部はハの後ナ、口縁部は横	スス付着
35	54	55区	８号住居址	高坏	3.8	13.0		１～３mm程の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	裾部端は横、柱状部はヘ	裾部は横	沈線（二条）
36	55	55区	８号住居址	甕か	5.8	15.8	不明	１～８mm程の砂粒を多く含む	やや良好	赤褐色	胴部はへか、口縁部は横か	不明	調整痕の確認は困難
37	56	55区	９号住居址	小型丸底	9.4	7.4	10.0	0.5～１mm程の砂粒をやや含む	良好	淡赤褐色	胴部はへの後ナ、口縁部は横	胴部中位にハ、他はハの後ナ、口縁部はハの後横	彩色（赤色顔料か）
38	57	55区	９号住居址	壷	4.9	10.0	不明	0.5～２mm程の砂粒をやや含む	やや良好	赤褐色	口縁部は横	斜ハの後横	器面が風化
39	58	55区	包含層遺物	坏	4.3	11.4		１～３mm程の砂粒をやや多く含む	良好	淡赤褐色	体部は不、口縁部は横	体部はへの後ナ、口縁部は横	
40	59	54区	包含層遺物	坏	7.1	13.0		１～２mm程の砂粒を含む	良好	赤褐色	への後不、口縁部は横	体部はへの後ナ、口縁部は横	成形時の亀裂有
41	60	不明	包含層遺物	壷	14.7	不明	19.6	１～８mm程の砂粒を含む	良好	淡赤褐色	胴部中位までは縦へ、上位は横へ、頸部は横	胴部と頸部はハの後ナ、最大径部はハで整形後ナ	
42	61	1区	包含層遺物	甕か	6.0	24.4	不明	0.5～２mm程の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	口縁部はヘラ磨き	口縁部はヘ磨	
43	62	54・55区	包含層遺物	坏蓋か	5.0	不明	不明	0.5～５mm程の砂粒を含む	良好	暗黄灰色	天井部は不、口縁部は横	天井部は回ヘ	ヘラ削りは器面の約１/２まで、須恵器

＊ ヘラ削り＝ヘ、ハケ調整＝ハ、ナデ＝ナ、横ナデ＝横、不定方向のナデ＝不

縦ヘラ削り＝縦へ、横ヘラ削り＝横へ、ヘラ磨き＝ヘ磨、回転ヘラ削り＝回ヘ

タタキ＝タ、器高、口径、胴部径の単位はｃｍ、収蔵Noは本県の収蔵システムに対応したナンバー

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

第４表　弥生・古墳時代出土遺物観察表（鉄器他）

No	収蔵No	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	刃部長	幅	基部長	厚さ	重量（ｇ）	備考
鉄１	16	55区	包含層遺物	鉄鎌	5.6	1.6	5.5	0.1～0.15	9.2	基部に木片有

No	収蔵No	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
鉄１	43	55区	６号住居址	不明	3.0（残）	0.7（最大）	0.25（最大）	刀子片か
鉄２	52	55区	７号住居址	ﾔﾘｶﾝﾅ	3.1（残）	1.2（最大）	0.2（最大）	刃部が変形
鉄３	53	55区	７号住居址	刀子	7.75（残）	1.4（最大）	0.25（最大）	端部を欠損

No	収蔵No	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	長径（cm）	短径（cm）	断面径（cm）	重量（ｇ）	備考
装１	63	45区	包含層遺物	耳環	3.25	2.9	0.8	25.4	鍍金有、錆付着

No	収蔵No	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	鏃身部	頸部	茎部	全長（cm）	鏃身部長	鏃身部幅	頸部長	茎部長	重量（g）	備考
鉄４	64	30区	包含層遺物	鉄鏃か	三角形か	有頸か	不明	4.25（残）	2.8	2.4	1.4（残）	不明	7.2	弥生の鉄鏃の可能性有
鉄５	65	55区	包含層遺物	鉄鏃	腸抉三角形	有頸	有茎	15.7（残）	5.0	3.7	5.6	6.1（残）	38.6	
鉄６	66	55区	包含層遺物	鉄鏃	三角形	有頸	欠損	7.8（残）	3.8	3.7	4.2（残）	不明	20.7	鏃身関部で屈折
鉄７	67	55区	包含層遺物	鉄鏃	三角形	長頸	有茎	10.1（残）	1.8	1.2	6.3	2.0(残)	11.1	

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

報告書抄録

ふりがな	いしのもといせきぐん
書名	石の本遺跡群 Ⅰ
副書名	第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	177集
編集者名	中村幸弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-0950 熊本県熊本市水前寺6-18-1
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いしのもといせきぐん 石の本遺跡群	くまもとけん 熊本県 くまもとし 熊本市 ひらやままち 平山町 あざいしのもと 字石の本	43201	121	32° 50′ 6″	130° 48′ 5″	940510 ～ 940803 951109 ～ 960223 960729 ～ 970327 970421 ～ 980331	420㎡ （1区） 7850㎡ （52区） 4500㎡ （54･55区）	国体主会場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石の本遺跡群	集落 集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居址 1 竪穴住居址 9	弥生土器 鉄鎌 土師器 須恵器 鉄鏃 刀子 ヤリカンナ 金環	線刻のある土器片出土 線刻のある土器2出土

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

写 真 図 版

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図版 1

石の本遺跡群遠景

図版 2

石の本遺跡群近景（54、55区）

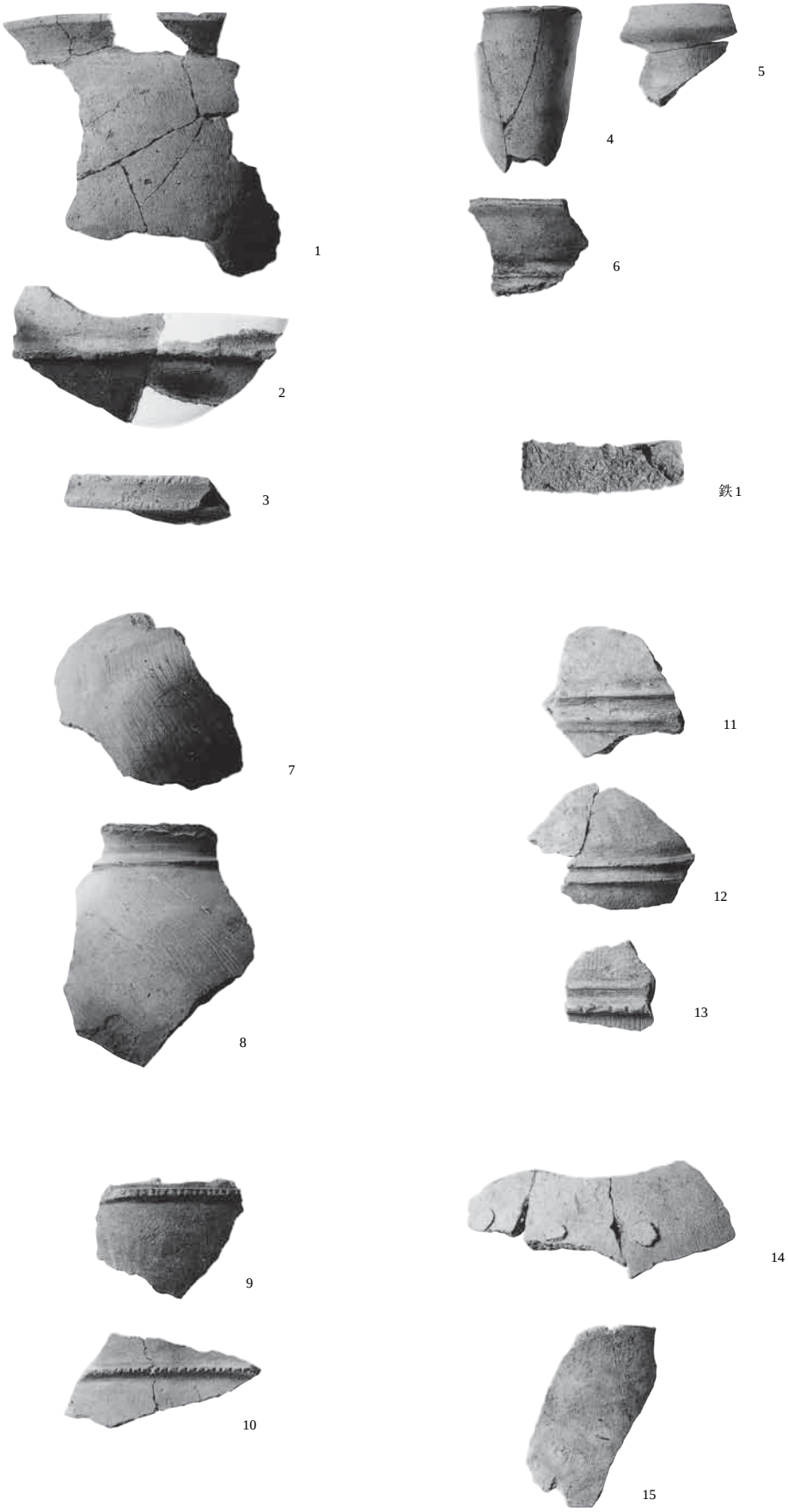
Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図版 3

弥生時代　1号住居址　　1．完掘状況（西から）

弥生時代　1号住居址　　2．完掘状況（北から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

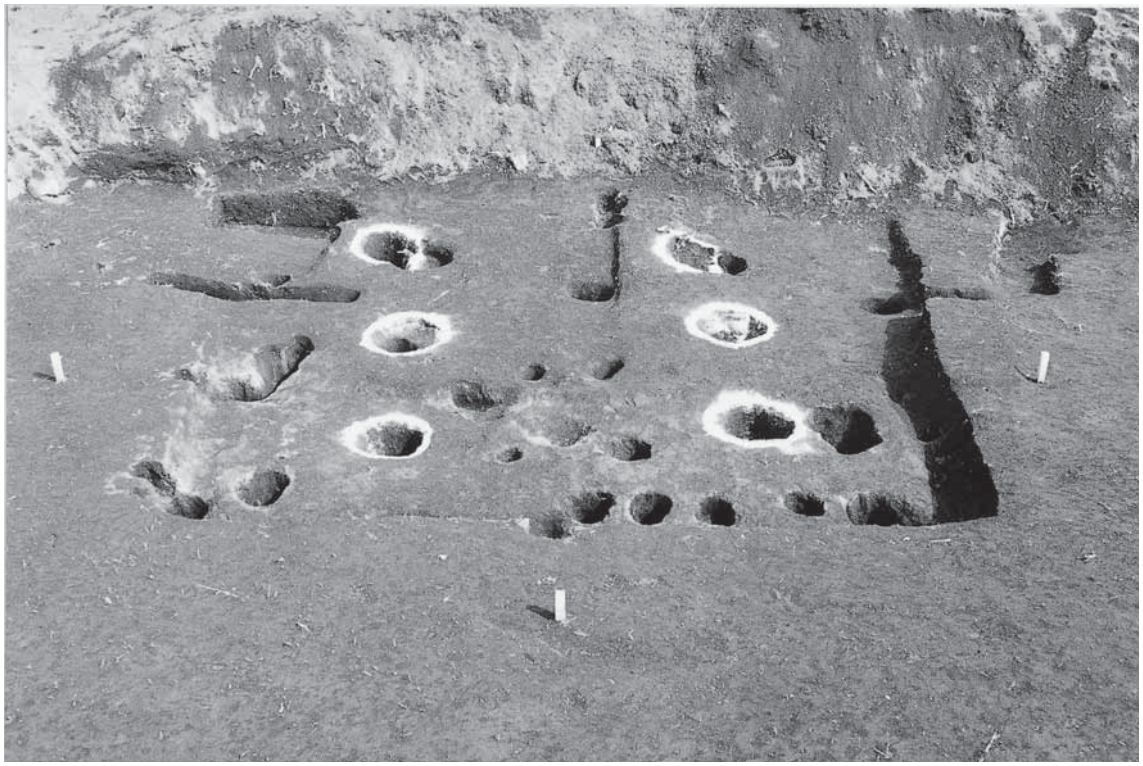


弥生時代包含層遺物

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

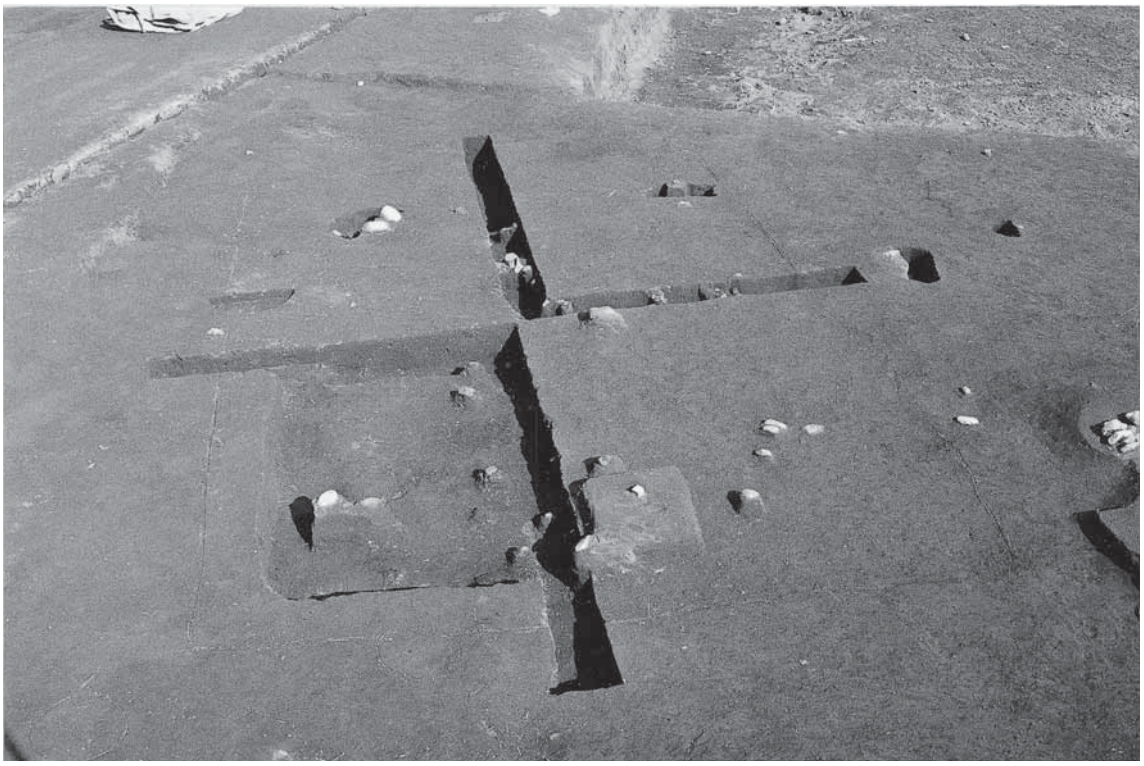
図版５

古墳時代　１号住居址　　１．遺物出土状況（西から）

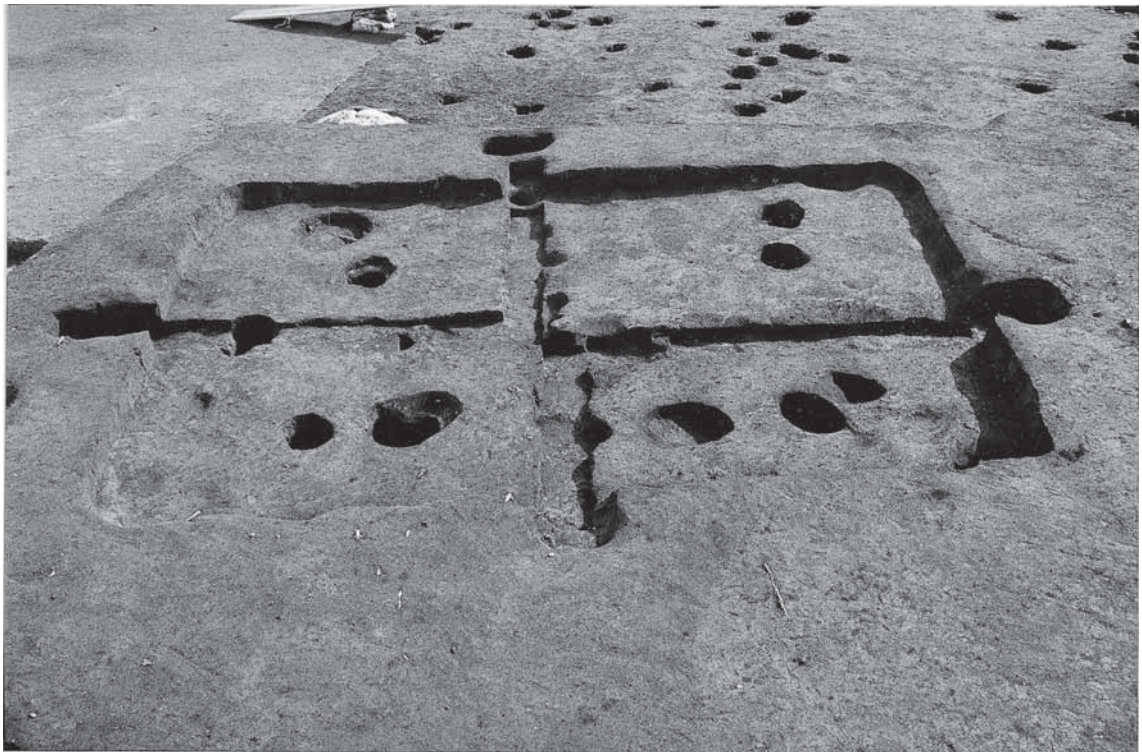


古墳時代　１号住居址　　２．完掘状況（西から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office



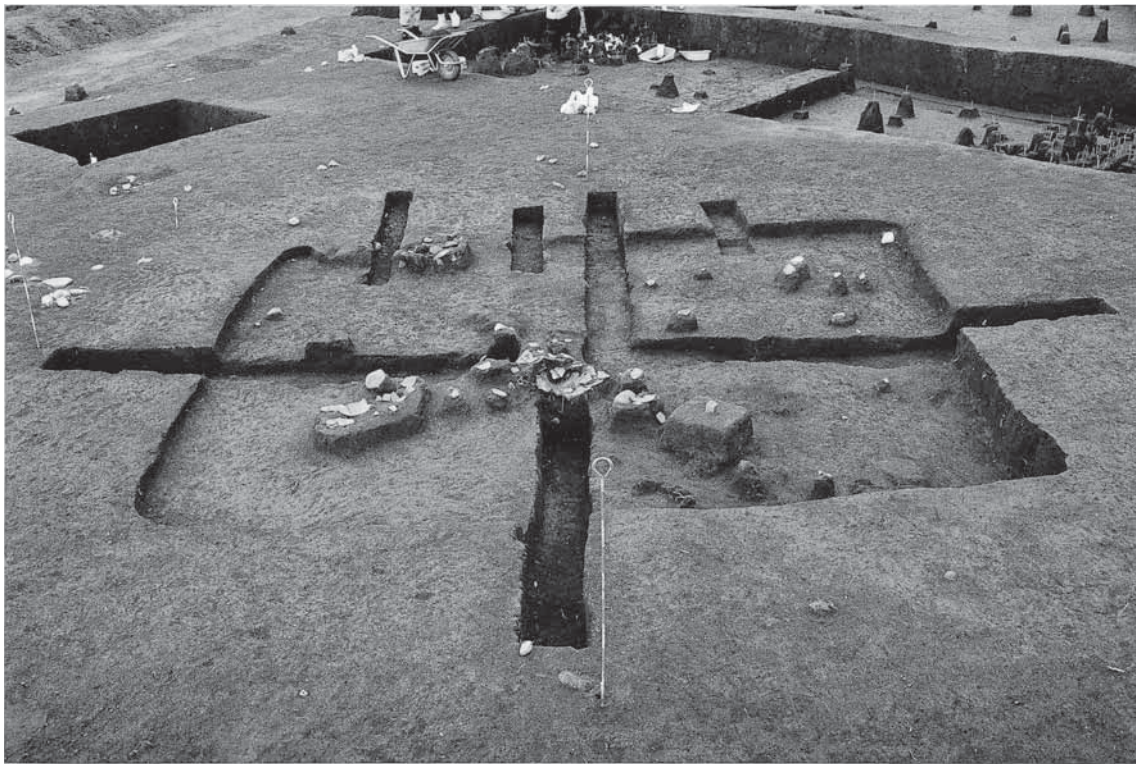
古墳時代　２号住居址　　１．検出状況（西から）



古墳時代　２号住居址　　２．完掘状況（北から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図版 7

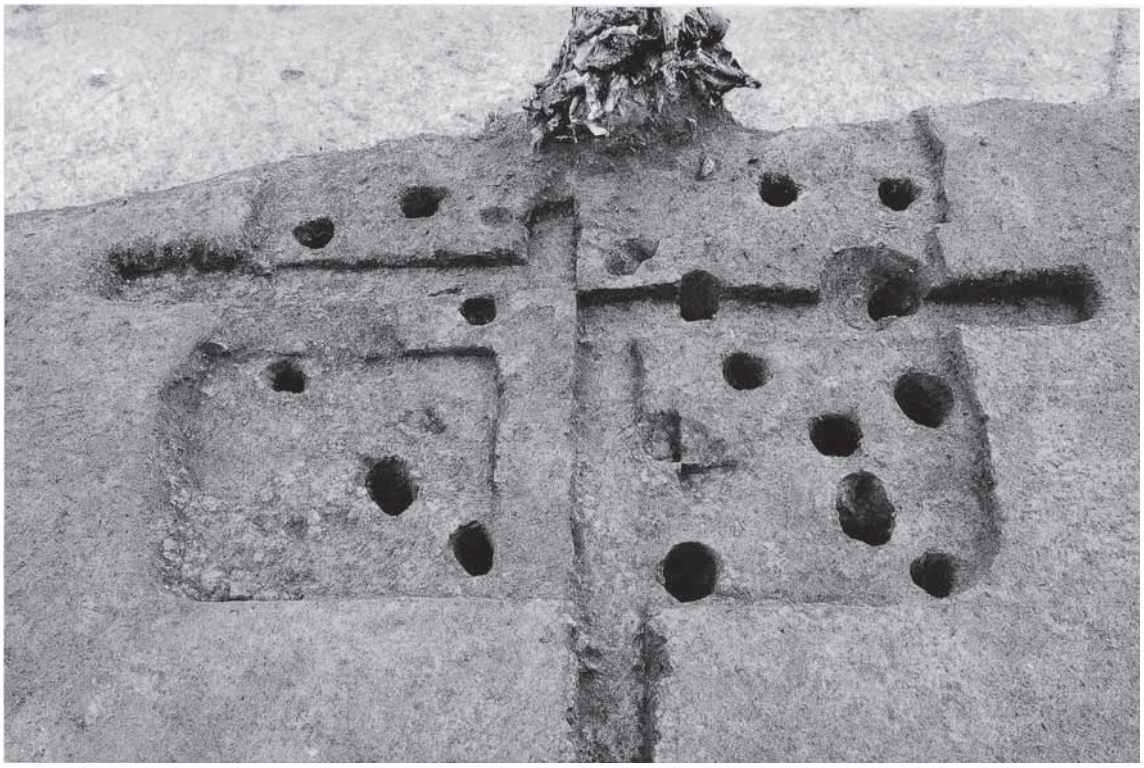


古墳時代　３号住居址　　１．遺物出土状況（北から）

古墳時代　３号住居址　　２．完掘状況（北から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

古墳時代　４号住居址　　１．遺物出土状況（西から）

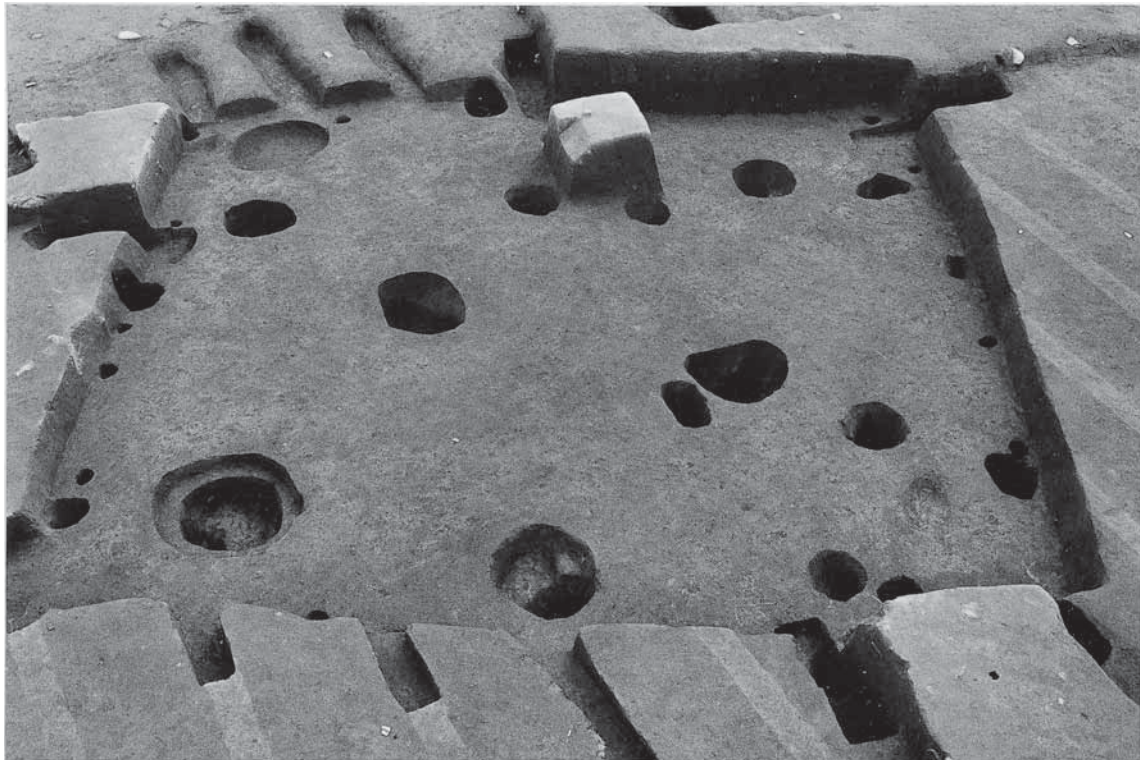


古墳時代　４号住居址　　２．完掘状況（西から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図版９

古墳時代　５号住居址　　１．遺物出土状況（北から）



古墳時代　５号住居址　　２．完掘状況（西から）

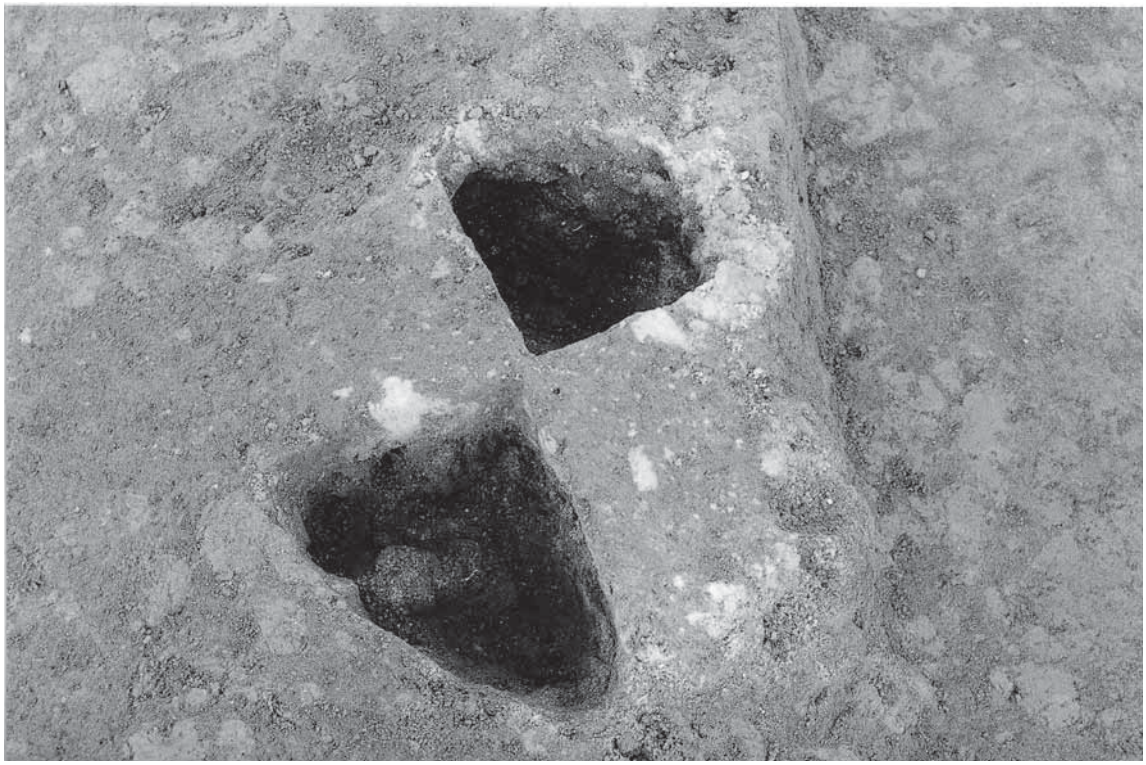
Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

古墳時代　６号住居址　　１．完掘状況（東から）

古墳時代　６号住居址　　２．完掘状況（南から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図版 **11**



古墳時代　７号住居址　　１．炉跡（上から）

古墳時代　７号住居址　　２．完掘状況（北から）

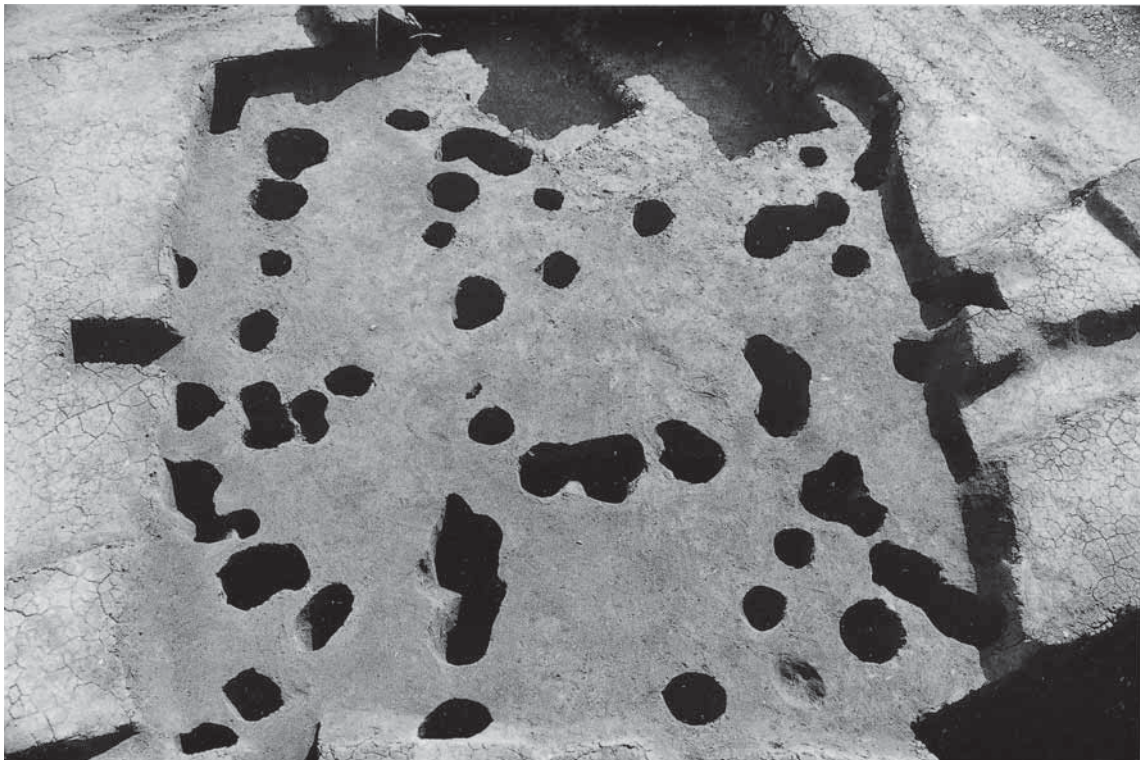
Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

古墳時代　８号住居址　　１．焼土・炭化物検出状況（南から）

古墳時代　８号住居址　　２．完掘状況（南から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

古墳時代　９号住居址　　１．遺物出土状況（西から）



古墳時代　９号住居址　　２．完掘状況（北から）

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

1

3

2

4

5

古墳時代　1 号住居址出土遺物

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

図版 **15・16**

6

9

7

10

8

11

古墳時代　２号住居址出土遺物

12

14

13

15

古墳時代　３号住居址出土遺物

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

16

19

17

20

18

古墳時代　４号住居址出土遺物

21

24

22

23

25

26

古墳時代　５号住居址出土遺物

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

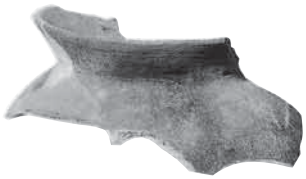
27

28

鉄 1

古墳時代　６号住居址及び住居址周辺出土遺物

29


32

30

33

31

34

鉄 2

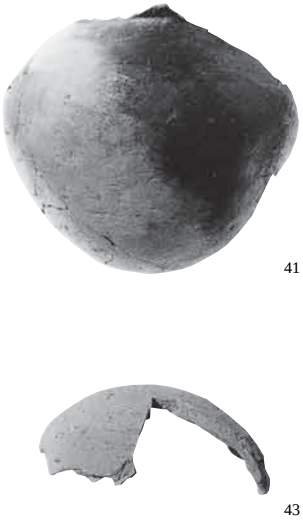
鉄 3

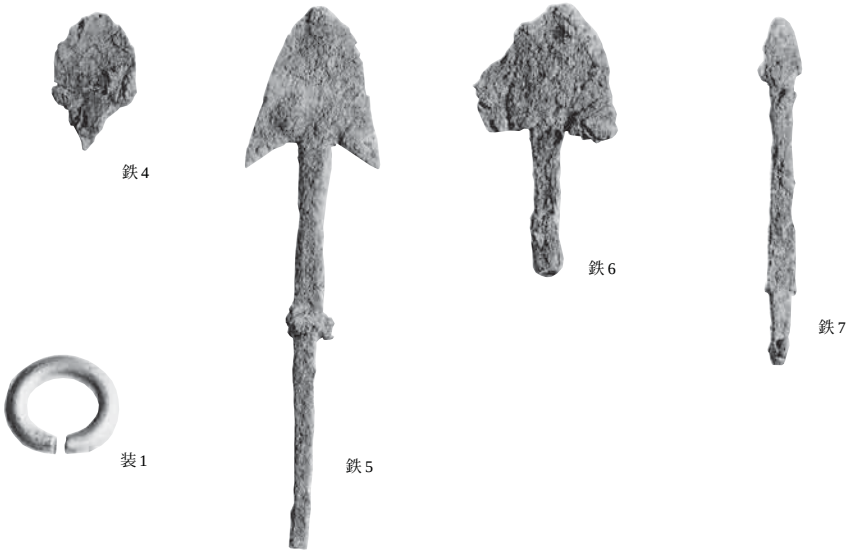
古墳時代　７号住居址出土遺物

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

古墳時代　８号住居址出土遺物

古墳時代　９号住居址出土遺物





古墳時代包含層遺物

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

あとがき

石の本遺跡群の調査は、4年間にわたる長期の現場となり、様々な面で多くの方々に御協力を賜った。以下にその氏名を記して、感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）

青山　玲子	赤星 さえ子	浅生久美子	飯塚 トシエ	池田　恵一	池永　幸子
石坂　信子	石阪　晶美	井島　秀子	磯崎　智子	一村　孝枝	井手口すみか
出田　亜希	井上　裕美	今福　隆史	岩下　武子	岩下知真子	岩永　智子
岩永 マスヨ	上田 まゆみ	上野　栄子	宇藤　猛	宇野　公子	宇野　教光
江藤　整	江藤　春子	大塚　洋子	大山 ヒロ子	岡田 イツ代	緒方三代子
岡本　初美	押方　富江	小田　潔	小田　信子	小山　正子	甲斐田末男
甲斐美紀代	片山 アツ子	片山　孝子	金子美代子	川井田久子	川越　淳仁
河添　トミエ	河端　立枝	河原　京子	木村　雅子	木村八千代	清田　幸夫
清田　聖子	清田 タエ子	窪田千代子	隈部　幸志	神田 アヤノ	古賀　敬子
古閑　末孝	古閑　知子	古閑　満代	古閑　麗子	小細工洋子	後藤　周二
後藤 トシ子	木場　敬子	木幡　章子	坂口　模	坂口　智宏	坂口富佐子
坂田 ハツ子	坂本　直子	坂本　政春	坂本　吉輝	作本　真弓	佐々木冨美代
貞苅美津子	佐藤　恵子	佐藤　淳子	佐藤　洋子	澤田　潔孝	澤田　まり子
澤本　亮	品川恵美子	柴田 やよひ	島村　佳男	白石美智子	杉本　富代
杉本　信雄	鈴木　笙子	瀬上 ムツミ	瀬上 ルリ子	瀬上　昭義	左座　高子
曽我　敬子	高野　悦子	高松　北子	高森 サツ子	田北 かつえ	竹沢恵美子
竹下千枝子	田崎 よし子	田尻美知子	田添　義光	田中智恵美	田中　豊熊
田中　信子	田上佐千子	田上 ツチ子	田部　英俊	溜渕　俊子	塚野　洋子
塚本　博子	辻森　妙子	津田 ヤエ子	土田 ちえみ	堤　マツエ	津留　敦子
津留　雅子	寺本　幸子	寺本　令子	徳留　真弓	冨田　正大	富田　和義
冨田　知子	富田 トリ子	冨田美津代	富田　良子	内藤　直美	中川　梅子
中川みち子	中島 ひろみ	中竹　慶子	永野千代女	永野　恒雄	中原　義高
中原 キミヨ	中村　キヨミ	中村　茂二	中村　啓史	中村千鶴子	中村　勉
永山　邦子	中山　森重	波床せい子	奈良由巳子	成松　洋子	成瀬　祐介
西島　寿子	西田　郁子	西田　君穂	西村　栄子	西村マチ子	野口　哲也
野口　紀子	野崎千枝子	野崎　洋之	橋本 キヨカ	橋本 みどり	服部　徳子
服部美紀子	花元つぼみ	馬場　英子	馬場　健次	馬場 としの	浜崎　清子
林田　恵子	原　かおる	原口 あつ子	原　スズ子	原田　隆博	原田　直敏
原田　春子	番山　明子	東　一平太	平井　和子	平岡　敏史	平川恵里子
平田眞由美	平田　雄	廣兼　澄雄	廣兼利栄子	廣野　幸子	福岡　雄樹
福島　敬子	福田久美子	福田　淳二	福山由美子	藤島美紀子	藤田千年勢
藤山　明子	淵上　久史	府内　博子	船本 とみ子	古澤　俊介	古庄美伊子
古谷　生子	堀川　貞子	堀部 チカ子	堀　三恵子	桝田勢津子	桝田 ツル子
桝田 ユリ子	松井　昭子	松尾　博美	松崎　渉	松島 セイ子	松永謙太郎

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

松野　良二	松本加代子	松本　直枝	松本　裕子	三浦佐代子	三浦ハルノ
水上　順子	水上　敏貞	水野美知子	水谷　精子	溝上　安子	光澤　敏春
南　　建	宮崎　典子	宮崎美和子	宮田ひふみ	宮西　邦恵	宮原テル子
宮本　博雪	宮本 ルイ子	村上 カツ子	村上千万年	村上百合子	村崎　妙子
村田　京子	元島　睦美	森　　朱美	森崎　潔子	森田 ハルエ	森田　ミドリ
森田　芳枝	森　　チドリ	森本百合子	矢野　クミ子	山内　時子	山浦 チズ子
山口　磯子	山口　和子	山隈紀代美	山田　友子	山部由紀子	山本　積
山本真佐江	山本　安臣	吉田　静枝	吉松　輝代	吉村　幸孝	吉本佐与子
吉本　清也	米満　豊次	米満まし子	米村　大	笠　法子	若杉　健介
若月　孝子	渡辺いわ子　他				

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

熊本県文化財調査報告　第177集

石の本遺跡群 Ⅰ

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成11年3月31日

発　　行　熊本県教育委員会

〒862−0950熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　株式会社　ハタノ

〒860−0079熊本市上熊本2丁目1番30号

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

10　教　教文
②　009

Copyright by Board of Education of Kumamoto Prefectural Office

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第１７７集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：石の本遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日